

---

# そよ風に歌声を乗せて

おにぎり（鮭）

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

そよ風に歌声を乗せて

### 【Nコード】

N5346X

### 【作者名】

おにぎり（鮭）

### 【あらすじ】

歌田音アパートに一人暮らしをする、あまのがわ天川 しゅん駿。  
ゲームが大好きでゲームばかりやっていた高校入学式の三日前、  
ジューズを買いに出かけた先でたまたま、隣の部屋に引っ越して来る途中だった初音ミクに出会う。

ミクとの出会いをきっかけに駿と駿の周りの環境が少しずつ変わって、彼は成長していく。

この小説は処女作であると同時にボカロに対する「こんなだったらしいな」と言う作者の勝手な妄想で構成されたものですので、ダメな方は戻るを押して下さい。

それでもOKな方はどうぞ生暖かい目で読んでやってください。

## 登場人物紹介？（前書き）

初めての連載小説投稿です。

更新はプライベートの用事（学校等）や気分でかなりの不定期更新になると思います…

駄文の上に、自分の「ボカロがこんなだったら」的な妄想気味の設定があるので、それでもOKな人は生暖かい目で見守ってください。

ちなみに最初は主要メンバー二人の紹介です。

## 登場人物紹介？

とりあえず登場人物紹介。（後で変更する可能性あり。できれば避けたい…）ちなみに年齢は初登場時

あまのがわ  
しゅん  
天川 駿

15才 高校一年生

好きな物 ゲーム、一人でいること

嫌いな物 うるさい所（学校等） 面倒なこと

うたたね  
歌田音アパートに住む高校生。

母親を幼くして病気で失う。父親は一応いるが、単身赴任のため基本一人暮らしをしている。

ゲーム好きで暇さえあればゲームのことを考える。人付き合いはあまり得意でなく、一人でいることが多い。

面倒くさがりで基本的に何か頼まれると「面倒くさい」と断ってしまう。だが、困ってそうな人には「面倒くさい」と断っていいつつ、手助けをする優しい一面も。

本当は友達がもっと欲しいが、うまくコミュニケーション出来ないため、友達はごくわずか。

初音ミク（はつね みく）

15才 高校一年生

好きな物 ネギ、歌うこと、明るい雰囲気

嫌いな物 虫、怖い物、一人ぼっち

駿の住むアパートの隣の部屋に引っ越して来た少女。腰まである緑色の髪をツインテールにしている。

性格は明るく、たまに天然。歌うこととネギが大好きで、暇な時は鼻歌を歌い、朝、昼、晩に必ずネギを食べる。おやつもネギのがある。

駿の性格を知ってか知らずか、冷たくあしらわれても笑顔で接し続ける。

事情があるのか一人暮らしをしているが、一人でいることが苦手なようで、駿の部屋に押しかけてくる時がある。

結構泣きやすかったり、そうでもなかったり。

性格や見た目の可愛さからクラスの人気物で、男子からはかなりの人気を得ている。

## 登場人物紹介？（後書き）

読みにくくてすみません…

まだ二人しか紹介していませんが、ほかのメンバーもちょうちよく紹介したいと思います。

ちなみに作者にネーミングセンスなんてものは存在しないです。  
その辺は勘弁してください…

## 第1話 春休みの出会い（前書き）

とりあえず、一話です。

誤字、脱字には気を払いましたが、あるかも知れないので、あつたらコメントしてください。

ちなみにタイトルとかは適当に決めました。パツと思ひ浮かんだのをそのまま打ち込んでます。なのでタイトルと内容が一致しない可能性大です。すいません…



## 第1話 春休みの出会い

4月5日、歌田音アパートの105号室で俺、天川 駿はアクションゲームをプレイしていた。

「よしっ、後ちょっとで…」

《ぐわあああ…》

テレビ画面から主人公の絶叫が聞こえる。

「んだよ！このっ！」

後少しで敵ボスが倒せそうだったが、一瞬の隙を突かれやられてしまった。

「はあ……なんか喉渴いたな。ジュース飲むか」

かなり集中していたためか、俺は喉が渴いていた。テレビがあるリビングを抜け、キッチンの冷蔵庫に向かう。

「あ、ジュース切れてるわ。なんだよ…ったく…」

冷蔵庫を閉め、その場で少し考える。喉の渴きを潤すだけなら水道水でよいのだが、それは嫌だった。かと言って外に買いに行くのも面倒だった。

「うっん……たまには外に出るか」

結局外に買いに行くことにした俺は、部屋の戸締まりをして、財布、携帯、家の鍵を持って玄関に向かった。

玄関の鍵を閉め、アパートから出ようとした時、アパートの前で誰かを待っているのか、しきりに道路を覗く大家さんがいた。声をかけて立ち話をさせられるのは嫌なので、気づかれないように出ようとしたが…

「あつ、駿く〜ん、しゅ〜んく〜ん」

見つかった。

「はぁ…」

溜め息をついて振り返り

「なんすか？」

といいながら振り向く。

「今忙しいんすけど」

そう言ってなんとか逃げようとしたが

「はっはっは、相変わらずつれないねえ」

と笑いながら大家さんが笑いながら近づいて来る。

（人の話聞けよ、おい…）

俺の住んでる歌田音アパートの大家さん。50代のオッサンで名前なんて覚える気がなかったから、なんて名前なのかは知らない。「大家さん」としか呼んでないけどそれでいいと思う。面倒くさいし。オッサンと呼ぶよりはいいだろう。

「いやあ、実は今日新しい入居者が来るはずなんだけど、予定の時間になっても来ないんだよねえ」

大家さんが困ったようにこちらを見ながら言う。

「そこでさ……」

言いかける大家さんを遮って

「人探しなんてやりませんよ。面倒くさいし、俺はジュース買いに行くだけですから」

と拒否した。

「そんなつれないこと言わないで……っておい！話はまだ……」

これ以上相手をしていたら確実に人探しをさせられる。そんなのはごめんなので、大家さんを無視してさっさとジュースを買いに行った。

「で……故障中かよ……」

最寄の自販機までジュースを買いに行ったのはいいが、あいにく自販機は故障中だった。

（今帰ったら大家のオッサンに捕まるよな…）

そう思い

「面倒くさいけど散歩がてら自販機探すか」

と独り言を言っ、俺はアパートとは反対方向に歩きだした。

どのくらい歩いただろうか、さすがに引越して来て一ヶ月しか経っていないのでは、どこに自販機があるか、わからない。ある程度の道は覚えたものの、自販機の配置まではさすがに覚えられなかった。面倒くさいし。

しばらく歩き続け、なんとか自販機を見つけることができ、迷わずスポドリを買って、一口飲んだのはいいが

「うえっ、甘すぎだろ。これ…」

普段より多く歩いたせいで、汗もかいていた。だからだろうか、いつもの倍は甘く感じ、とても飲む気にはなれなかった。

（スポドリじゃなくて、お茶にすりゃ良かったな）

そんなことを考えていると、そよ風が吹いた。

春らしい、気持ちのいいそよ風だった。

（たまには、散歩も悪くない、か）

そんなことを考えながら、ぼーっとしていると、風に乗って歌が聞こえてきた。

歌の聞こえる方向に歩いて行くと、小さな公園があり、いくつかあるベンチの一つに緑色のツインテールの髪の子が座りながら歌っていた。

（声、綺麗だな…）

思わず聴き入ってしまったことに気づいた俺は、緑色の髪の女の子に気づかれないうちに立ち去ろうとした。

だがその瞬間、バッチリ女の子と目が合ってしまった。

（あ…目が合っちゃった…とりあえず気まずいし、無視しよう）

そう思い、無視して帰ろうとしたのだが…

「すいませ〜ん」

呼び止められた。なんか今日は障害をやり過ごせない。呪いか？

「なんすか？」

ぶっきらぼうに返事を返す。

「あの…私今日この町のアパートに引っ越して来たんですけど、その…道に…迷っちゃって…どこに行けばいいか…」

「地図使えば？」

最もなことを言ってみる。

「地図を見ても、自分がどこにいるかわからなくて…」

(…こいつ、地図読めねえのか?)

「で、俺が通り掛かったから声をかけて来たと？」

思ったことは口に出さず、質問した。

「はい…」

女の子は申し訳なさそうに下を向いて答えた。

(ん? そういや大家のオッサン、今日新しい入居者が来るって言ってたつけ。聞くだけ聞いてみるか。もしそうなら、オッサンの待ち伏せ喰らっても、人探ししなくていいし)

「おい、そのアパートの名前、覚えてるか？」

そう聞くと女の子は

「えーっと…うた…うた…うた…うた…うた…うた…うた…うた…」

(…自分の引越先の名前くらい覚えろよ…)

内心女の子にツッコミながら

「それ、歌田音アパートじゃないのか？」

と訂正してやる。

「そうだ！歌田音アパートです」

ビンゴだ。これで大家のオッサンにパシリにされずに済むぞ。

思わずガッツポーズを小さく決めていたようで、それを見た女の子に

「どうしたんですか？」

と聞かれてしまった。

「いつ、いや、俺も歌田音アパートに住んでるからさ、これで大家さんにパシラ…じゃなくて近所が賑やかになるなって…あは、はは」

(…全然ごまかせてねえよな。これ…)

と、女の子のリアクションにびくついてた俺だったが、

「あつ、ほんとですか！？いやゝ運がいいなあ、同じアパートの人に会えるなんて」

と全くごまかそうとしたことに気づいていない様子だったので、少し安心した。

「あつ、そうだ」

そついうと女の子はこっちを向き

「今日から歌田音アパートの104号室に住む、初音ミクです。よろしくね」

と自己紹介をされた。が、俺は自己紹介なんて面倒でやりたくないの

「よろしく」

とだけ返し

「じゃあ案内してやるから」

と言ってアパートに向かって歩きだした。

「えっ、ちょっと…待ってよ」

その後を初音と名乗った女の子が追いかけて来る。

これが、ミクとの初めての出会いだった。



## 第1話 春休みの出会い（後書き）

疲れた…

携帯で投稿は効率が悪い…

ある程度は編集して読みやすくなるようにはしたつもりですが…  
やっぱり読みにくいかも…

結構グダグダな内容になった気がします。

何か感想等ありましたら、よろしく願いします。

## 第2話 春休みの出会い？（前書き）

テスト終わったあゝ（二つの意味で）

第2話です。相変わらずグダグダです。

## 第2話 春休みの出会い？

「ねえー、待ってってばー」

私はそういつてさつき偶然出会った引越し先のアパートの住人だという男の子を追いかけた。でも男の子は早足で歩いていつてしまふ。だから私は男の子との距離が離れるたびに小走りで追いつこうとしていた。

「名前くらい教えてよー」

そう聞いてみるものの

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

男の子は全く口をきいてくれなかった。

この人に会うまで、私は道に迷って公園で途方にくれていた。地図を見ても自分がどこにいるか分からないし、近くに誰も人がいなかったからどうしようもなかったからなんとなく歌を歌っていた。

そしたら、視界の端に人影が見えて、そっちをみたら男の子と目が合った。

男の子は慌てて立ち去ろうとしたけど、思い切って声をかけてみた。事情を話したら、その男の子が引越し先のアパートに住んでいると言った。

（やった！これでやっとアパートにたどり着ける！）

そう思って男の子の後を付いていつてる訳だ。

しばらく歩くと、遠くから人の声が聞こえた

「おゝい、駿くゝん。見つけてきてくれたかい？」

どうやら、私は探されていたみたいだった。

（え？じゃあこの人は私を探してくれてたの？）

そんなことを考えていると「駿」と呼ばれた男の子が

「誰も大家さんの手伝いをするなんて、言ってませんけど？」

とさっきの声の主に向かって言った。

「でも、後ろにちゃんというじゃないか。素直じゃないねえ」

と大家さんが笑う。

「別に。ジューズ買いに行ったらたまたま会っただけです。じゃあ、俺、部屋に戻るんで」

そういつて、さっさと男の子は自分の部屋に戻っていつてしまった。

「ごめんな〜冷たい態度で。あいつ、悪いやつじゃないと思うんだけどねえ」

と部屋に戻っていく男の子をみながら大家さんに謝られた。

「あつ、いえ・・・そんなことないです。それに私の方こそすいませんでした。道に迷っちゃって・・・ご心配おかけしました。」

慌てて私も謝る。

「いやいや、いいんだよ。え〜っと、初音ミクさん、でいいんだよね?」

そう大家さんに名前を聞かれたので

「はい、今日からお世話になります。初音ミクです」

と返事をして、私は頭を下げた。

「おいおい、そんなに硬くならなくていいよ。まだうちも建てたばかりのアパートだから、入居者がほとんどいなくてねえ。今居る入居者は君を含めて、さっきの子しかいないんだ。」

「そうなんですか・・・」

私は先程の男の子のことを思い出す。

「あの子も引越して来たばかりでね、友達もいないみたいだから、まあ仲良くしてやってくれ」

そう言っただ大家さんはまた笑った。

「ああ、初音さん。荷物とかはもう全部届いて部屋に入れてあるか

ら、後は自分でうまくやってくれよ。あたしゃ101号室にいるから、用があつたら呼んでくれ。じゃあ」

そう言つて大家さんも自分の部屋に戻つていった。

(…今日からここが私の家か…)

そう思いながらアパートを見上げる。

(荷物の整理、終わつたらあの子に挨拶に行こう)

私も、新しい我が家に向かって歩き出した。

・  
・  
・

なんとか大家のオッサンをやり過ごし、自分の部屋に帰つて来た。さっき買ったスポドリは、ずっと握つてたせいで、もうぬるくなつていた。

一口だけ飲むと、すぐに冷蔵庫にしまい寝室に向かった。久しぶりに外に出て、疲れたので昼寝することにした。

(今は…二時半か…)

時計を確認し、そのままベッドに倒れこんで、眠ってしまった。

…どのくらい眠っていたのだろうか。不意に目が覚めたので、時計を見る。

（五時半…かなり眠ったな…）

そう思いながら、またうとうとし始めた時

ピンポン…

インターホンがなった。

「はーい。今行きます」

そう言って玄関のドアを開けると、新しい隣人のあの子が立っていた。

「あの…一応挨拶した方がいいと思って…」

と、少し下を向きながらその子が言った。

「ああ…わざわざそんな面倒なことしないでいいんだがな」

俺はそう言って、ドアを閉めようとした時

「あつ、あの！」

「んだよ…」

女の子に慌てて呼び止められたので、閉めようとしたドアを止めた。

「あの…せめて名前を覚えてくれない…かな？」

（またその質問か…）

さつき歩いている時は、面倒くさいて答えなかったが、まあこれから先も顔を合わせそうなので、

「天川 駿」

とだけ答えた。

「じゃあ、駿君これからよろしくね！私のことはミクって呼んでくれればいいから」

（なんだコイツ！？俺のこと苗字じゃなくていきなり名前で呼びやがった。馴れ馴れしい奴だな…）

そう思ったが、口にはださず

「こちらこそよろしく。初音さん」

とだけ返しておいた。

「ミクでいいってば。それよりそろそろ夕飯だよね？挨拶も兼ねて、大家さんの所で皆で食べようと思うんだけど、一緒に食べようよ」

といきなりミクが誘って来た。

「…別にいいけど」

断ってもなんか粘られそうなので、とりあえずOKしておいた。



「ほんと！？じゃあ六時に大家さんの部屋で！」

「えっ…あ、おい！」

止める暇もなく、ミクは自分の部屋に飛び込んで行った。

「面倒くさいなあ…まあ、しょうがないか…」

そう呟き、とりあえずシャワーを浴びて着替えようと、風呂に向かった。

（…なんか、面倒な奴が隣に引越して来たなあ…）

そう思いながら、大家さんの部屋に行く準備を進めていった。

## 第2話 春休みの出会い？（後書き）

とりあえず第2話ですが、なんか思っように書けません。

相変わらずグダグダな駄文ですが、とりあえず下手くそながらも頑張っ更新していきたいと思います。

### 第3話 入学式にて（前書き）

ちよつと更新遅れました。

相変わらずのご都合主義な駄文です。

### 第3話 入学式にて

ピピピピッ

ピピピピッ

目覚まし時計が起床時刻を知らせる。

「ん……」

まだ眠いが、起き上がって目覚まし時計を止める。

「あ……今日は入学式か……」

4月8日、今日は俺がこれから3年間通う有賀島高校ありがしまの入学式がある。

（初音さんとは、8時に合流だったな）

集合時間を確認し、3日前のことを思い出す。

「それじゃあ、ミクちゃんの引っ越しを祝って、かんぱーい！」

大家さんがビールを注いだコップを掲げる。

（この人……もう酔っ払ってるぞ……）

そんな酔っぱらった大家のオッサンと俺、ミクの三人でちやぶ台

を囲んでいたのだが、そのちゃぶ台の上にはネギが山のように盛られた丼が3つ置かれていた。

（ありえんだろ…絶対このネギ多過ぎる）

開始早々酔っ払っているオッサンもありえないが、このネギまみれの飯も俺にとってはありえなかった。

（今日、ちゃんと歯を磨かないと明日ネギ臭くなりそうだ…）

もちろんそんなことは作ってくれたミクの前では口が裂けても言えないので

「いただきます」

と言って、ありえない量のネギが乗った飯を食いはじめた。

（…予想外にうまいぞ）

ネギだらけな見た目から、とんでもない味がするものと思っていたが、食べてみると意外にもうまかった。

「今日はちよつと張り切って作ったんだ。美味しい？」ミクが笑顔を見せながら質問する。

「ああ、うまいよ」

と、俺は返事をする

「ほんと！？もしお口に合わなかったらどうしようかとちょっと不安だったけどよかった」

と、ミクは嬉しそうに言って自分もネギ丼を食べ始めた。

（……ちよつと待て。コイツ食うの早くないか？）

俺がそう思うのも無理はなかった。丼からあふれそうなまで盛ってあったご飯が、5分もかからないうちにほとんどなくなっていたからだ。

（俺だってこれ食うのに10分はかかるのに…）

啞然とする俺をよそに完食したミクは

「あゝ美味しかった。やっぱりネギは最高だなー」  
と満足げに言っ

「あ、ねえ駿君。もしよかったら入学式の日一緒に学校行かない？」

とまたもや笑顔を見せながら誘ってくるので

「別にいいけど」

と適当に返事を返しておいた。

そこに大家のオッサンが

「おゝ？なんだ駿君もてでもないかあゝ」

と酒臭い息を撒き散らしながら絡んできた。

「大家さん、酔ってるんならその酔い覚ましてあげましょうか？」

そう俺が言っと

「おお、おつかないねえゝひつく」

とふらゝつと両手を上げて降参のポーズをとった。

（この人、酒に弱いくせにたくさん飲むからなあ…）

そんな俺の心配をよそに

「おゝし、今日はとことん飲んで騒ぐぞゝ。ミクちゃんも飲むかい？」

といって大家のオッサンがミクに酒を渡そうとしたので

「未成年者に酒のませようとしてんじゃねえ！！」

と、叫びながら酒を没収しようとした俺だったが

「あゝ、駿君も飲みたいよなあ。ひつく」

とカウンター気味に酒を口に流し込まれてしまった。

（うえっ、気持ちわるっ）

決して少ないとは言えない量の酒を飲みこんでしまったので、一気に酔ってしまい意識が遠くなっていった。

「あつ、駿君！大丈夫！？」

遠のく意識の中、ミクの慌てた声と酔っ払っているオッサンの声がうつすらと聞こえた。

（もう二度とあそこで飯を食ったりするもんか）

3日前を思い出し、顔をしかめる。

（今は…7時40分か…集合時間には間に合うな）

時計を確認して、準備を進めていく。

真新しい高校の制服を着て、部屋の戸締まりを確認し玄関に向かう。

家には誰もいないが  
「行ってきます」

と言って部屋を出た。

（…遅い。もう10分も遅刻してっぞ）

早めに家を出てきたのはいいのだが、肝心のミクが集合時間の8時を過ぎても来ないので、俺はイライラしていた。

（もう置いて行くか）



遅れてくる奴のためにいつまでも待ちぼうけを食らって我慢できる俺では無いので、学校に向かって歩こうとした時

「ごめーん！寝坊しちゃった〜！」

と後ろからミクの声が聞こえた。

（入学式から寝坊はねえだろ…）

そう思ったが口にはださなかった。

「ねえねえ、今日って何時までに学校行けばいいんだっけ？」

ミクが俺に質問する。

「知らん。大体9時とかその辺だろ」

俺はそっけない返事を返す。

「そっか。ところでさ…」

そこから学校に着くまでミクに質問攻めされ続けたが、面倒なので全部適当に返事をした。

学校に着き、昇降口に張り出されたクラス分けの紙を見る。

（…俺は3組か）

3組の名簿に自分の名前があることを確認し、教室に向かう。

（学校なんてどうでもいいんだがなあ…早く帰りてえ）

そんなことを考えながら歩いていると、ミクがいない事に気づいた。  
が

（まあ、どうせ別のクラスだろうし俺がいなくても大丈夫だろ）

と思い、気にしないことにした。

教室に着き、自分の席に座る。もう既に半分くらいの生徒が集ま  
っており、知り合い同士の連中は集まって喋っていた。  
特にすることも無いので机に突っ伏して寝ていると

「もー、駿君。置いてくなんてひどいよう」

というミクの声が聞こえた。

「なんだ、初音さんも同じクラスだったのか」

「なんだ、ってリアクション薄いなー。もっと喜ぼうよ。せっか  
く同じクラスになったのに」

「別にいいじゃん」

面倒くさそうにそう返すとミクは頬を膨らませて、隣の席に座った。  
そんなことをしているうちに教室に担任が入って来た。

「皆の者、席に着くでござるよ」

入って来た担任は何故か着物を来て日本刀の様な物を腰にぶら下げた侍みたいな人だった。

「拙者は今日からこの有賀島高校1年3組の担任になるガクポでござる。苗字は秘密でござる。では今から今日の日程を連絡するでござるよ」

それから侍まがいの担任から今日の日程、入学式での注意事項を聞き入学式をやる体育館に移動することになった。

「ただいまより、有賀島高等学校の入学式を始めます」

教頭らしき人物が司会を務め、入学式は特になんの問題もなく進んでいった。・・・校長の話までは・・・

「私はこの学校の校長を務めます甲趙（こうちよう）です」

校長の名前を聞いた瞬間会場から笑いが起こる。

（どこの笑えない駄洒落だよ・・・校長の名前が甲趙とか・・・くだらないにも程がある）

呆れてふと隣を見ると、必死に笑いをこらえているミクが見えた。

「いいですか、この高校は伝統を重んじる・・・」

校長が熱くなって話しているが、周りの生徒は誰一人として聞いていなかった。

（校長も災難だな・・・こんな名前になっちまって・・・同情するぜ）

そんなことを考えながら退屈になった俺は、そのまま寝てしまった。

「・・・であるからにこの高校の生徒はよい大人になるように努力してほしいと思います。以上で挨拶とさせていただきます」

俺が再び目を覚ました時、ちょうど校長の話が終わった。

（何分寝てたんだ？）

ふと時計を見ると、時計の針は12時を指していた。

（・・・あの校長一時間しゃべってたのかよ・・・）

長すぎる校長の話に驚き、呆れてると

「以上を持ちまして入学式を終了します」

と非常に疲れた様子の教頭が式を閉めた。

式が終わって教室に戻ってくると、侍担任が「今日は皆の者も疲れ  
ておるだろうから、詳しいことはまた明日にしよう」

とすぐに解散にした。

（明日も確か授業ないんだよな。まあさっさと帰るか）

とりあえず今日はもう何もないのでそのまま家に帰ろうとしたが

「ねえ、駿君。折角だからちよつと町を歩かない？」

といつの間にか横にいたミクに手を引っ張られていた。

「おつ、おい。俺は家に・・・」

「いーじゃん、早帰りなんだしどつか寄り道して行こうよ！」

と有無を言わず家とは反対方向に連れて行かれてしまった。

（・・・勘弁してくれよ）

そう思いながらも俺はどこか、嬉しいとも楽しいとも言えそうな  
気持ちを抱いていた。

### 第3話 入学式にて（後書き）

担任まさかのガクポ

理由はありません。なんとなくです。

ボカロキャラの性格、口調等は完全に作者の妄想等からなので、  
「なんか違う」という場面もあるかと思いますが、そこは勘弁して  
下さい…

#### 第4話 初めての町歩き（前書き）

更新が不定期気味になってきました…

どうも平日は学校で疲れて執筆活動がはかどらない…

まあ、とりあえずそんな感じで4話です。

## 第4話 初めての町歩き

「こつちこつち」

そう言つて私は駿君の手を引つ張る。

「そんなに引つ張るなよ。別に急ぎの用じゃないんだろ？」

「そうだけど早く行きたいの！」

「やれやれ……」

呆れたように呟く彼を引つ張つて階段を上る。

「着いたあゝ」

私達が辿り着いた場所は公園だつた。

「……公園？なんでこんな所に來たがるんだ？」  
駿君が不思議そうに聞く。

「まあまあ、ちよつとこつちへ來てよ！」  
そういつて、私は公園の奥に歩いて行つた。

「お、おい！ちよつと待てよ！」

……私が彼を連れて來た場所。そこからは有賀島町を見渡すことができる場所だつた。そして、周りには満開になつた桜の花が、そよ風に煽られて綺麗な花吹雪を作つていた。



「どう？綺麗でしょ？」

そういつて、駿君のほうへ振り返った。

「ああ…綺麗だな」

そう返事を返した彼の声は、いつもの適当な返事の声ではなく、心からそう思っている声だった。

（やっぱり、本当は優しい人なんだ…）

桜に見とれている彼を見て、改めてそう感じた。

「ねえ、ベンチに座ろうよ。私、階段登って疲れちゃった」

そう誘って、私達はベンチに腰を下ろした。そして、今日私がこの場所に來たかった理由を話し始めた。

「実はね、駿君をここに連れてくるように、大家さんに頼まれてたの」

「え？大家さんに？」

驚いたように駿君が返す。

「そう。駿君、引越して來てからほとんど家から出てないみたいだから、たまにはこういう場所に來たほうがいいから連れてってやつてくれって、頼まれたんだ」

それを聞いた駿君は

「余計なお世話だぜ…俺の事なんてほっときゃいいのに」

と、少しぼやいていたけど

「でも、まあいい場所知ったよ。花見には最適だしな」

そういつて、笑顔で返してくれた。

それは、優しくて明るい笑顔だった。

「ふふっ、そうだね。来年は皆で花見にこよっか？」

そう私が言つと

「いや、大家さんは省かないと、俺の命が危ない…」

と、二日前を思い出したのか、大家さんと来ることを露骨に嫌そうな顔をした。

「あはははっ！確かに。今度は本当に死んじゃうくらいお酒飲まされそうだしね」

私は思わず吹き出して、笑いながらそう言ったら

「いや、そこは笑うところじゃないから」

とツッコまれた。

そして二人で

「…ぷっ、あははははっ！」

思いつ切り笑った。

ひとしきり笑った後、不意に駿君は

「なあ、初音さん。初音さんは桜って好きか？」

と質問してきた。

「うん！好きだよ。綺麗だし桜の花の色、なんだか可愛い色だから」

「そっか。俺も、好き…かな…」

そう返事した駿君の声には少しだけ悲しみとも寂しさとも取れるものが混ざったことに、私は気づかなかった…

「さあ、そろそろ帰ろうぜ」

そういつて駿君は立ち上がった。

「ええー、まだ行きたい所があるから付きあつてよ」

「…まだ何か頼まれてるのか？」

と、駿君はだるそうな顔で私のほうを見ながら聞く。

「違うよ。ここは頼まれたからだけど、私が行きたい所は別にあるの！それにまだお昼食べてないじゃん！私、お腹すいちゃった」

「…はいはい」

もうどうでもいいといった感じの駿君を連れて、私は町への道を歩いていった。

「いらっしやいませ、何名様ですか？」

「二名です。禁煙席でお願いします」

「かしこまりました」

公園を出た私達は公園の近くにあるファミレスでお昼を食べることにした。

（ほんとはおいしそうなお店あったから、そっち行きたかったな……ネギ、たくさん食べれそうだったのに……）

本当は行きたいお店があったんだけど、駿君が

「飯なんてどこで食っても同じなんだから、近くて安いファミレスでいいだろ」

と言って聞かないので、仕方なくファミレスでお昼を食べることにした。

「もう決まった？」

ファミレスのメニュー表を見ながら、駿君に聞く

「決まった」

「え！？早くない？」

即答されてしまったので、思わず聞き返してしまった。

「別に。いつも頼んでるもの選んでるから」

「あ…そうなんだ…」

イマイチ良い返事が思いつかなかったから、とりあえず急いで決めたようにしたけど

「別に急いで決めなくてもいいからな」

と駿君が言ってくれたので、それに甘えてゆっくり決めることにした。

・  
・  
・

ミクに公園に連れていかれ、また更に行きたい所があるとか言われた時は正直うんざりした。

（とはいえ、こんな所に連れて来てくれたんだし、もう少し付き合おうか…）

そう思い、ついに行こうと思ったが、さすがに昼飯は近くて安い場所がよかったので、渋るミクを納得…というか無理矢理丸め込み、ファミレスに来た。

席に着き、メニュー表を眺めた。

(…いつものマルゲリータでいいか)

一通りメニューに目を通したが、結局いつも頼んでるものに決めたので、メニュー表を元の場所に戻そうとすると

「もう決まった?」

と、まだ何にするか決めかねている感じのミクがメニュー表を見ながら聞いてきたので

「決まった」

と即答すると

「え!? 早くない?」

と驚いたように聞き返されたので

「別に。いつも頼んでるもの選んだから」

そう返事をした。

「あ…そうなんだ…」 いい切り返しがいまいち浮かばないのか、言葉に詰まったミクは、再びメニュー表に目を落として

「何にしようかな…ちょっと急がないとな…」

と呟くのが聞こえたので

「別に急いで決めなくてもいいからな」

と言ってあげた。

（気を遣わせっぱなしも良くないしなあ）

そんなことを考えながら携帯音楽プレーヤーを取り出して飯が来るまで音楽を聞いて待つことにした。

「お待たせしました、ネギたま井でございます」

しばらくして、店員が運んで来たものは、これまたネギがたくさん乗った井だった。

「はい！私です！」

待ちかねたようにミクが手を挙げる。

「…初音さん？」

「ふえ？なあに？」

「あんた、朝もネギ食ってなかったか？なんか隣からすげーネギの匂いしたんだけど…」

朝、家を出る時ネギの強烈な匂いがしたことを思い出して聞いてみた。

「あゝ…やっぱり匂い漏れちゃってたか」

（やつぱり？やつぱりだと…コイツは一体どんなネギ料理をしてたっていうんだ…）

と失敗したと言わんばかりの表情をするミクに疑問符だらけの俺だった

「いや、今日寝坊しちゃったから急いでネギを焼いてたら、焦がしちゃって…」

（…あれはネギの焦げた匂いか…）

匂いの原因がわかったのは良いのだが

「なんで二食連続でネギを食べようなんて思うんだよ？飽きないのか？」

（普通ならしないだろ、こんなこと。少なくとも俺はやらんぞ）  
とか考えながら質問してみた。  
すると、とんでもない答えが返ってきた。

「え？私、一日三食全部に必ずネギは入ってるよ？駿君もおんなじ様なことやってるでしょ？」

（その発想はなかった…ていうかいらなかった…）

あまりにも奇想天外な答えに、俺は啞然とするしかなかった。

「あ…いや…やらないだろ…普通…」



かろうじてそれだけ答えた俺は、美味そうにネギたま丼を食うミクを理解することを諦め、自分の昼飯を食べることに専念した。

昼飯も食い終わり、一息ついた俺達は洋服店にいた。

「…うわぁ…この服、かわいいなぁ…」

ファミレスを出てすぐにミクが

「ねえねえ、ちょっと洋服見に行きたいから洋服屋さん行こうよ」

などと言いはじめたので、ついて来たのはよかったのだが…

（なんか…女ものの服のコーナーにいるの、すげー恥ずかしい…）

こんな所に男が来るなど、デートの時くらいなものだろうが、もちろんそんな経験のない俺は周りからの視線を気にせずにはいられず、常に挙動不審な状態だった。

（…初音さん、まだここにいるつもりかな？）

そんなことを考えていると

「ねえねえ、これ可愛くない？」

そう言ってミクが持って来たのは、ピンク色のスカートだった。

「さぁ？どっからの辺が可愛いつていうのか、俺にはわからんか

「何とも言えねえよ」

今まで女子と遊ぶことはおろか、話したことすらまともにないので、それは事実である。

「別に基準なんてないよ？駿君が可愛いって思つかどうかを答えてくれればいいから」

そうミクに言われたが、正直良くわからないので

「とりあえず、着てみれば？そしたら分かるかしんねーし」

と言ってみた。

「えっ…うん…じゃあ着てみる」

そう言って試着室に入っていたミクの顔が少し赤くなっていた気がした。

まあ気のせいだろう。

それからやや時間をおいて、ミクが試着室から出て来た

「お待たせ！えっと…どう？…似合ってる…かな？」

上着は制服だったが、スカートは先程ミクが選んだピンク色のスカートに着替えていた。

「あ…可愛い…」

言葉を選ぶ前に、思わずそう言ってしまった。

すると、その言葉を聞いたミクの顔がみるみる真っ赤に染まり

「えっ…あの…えっと…あ、ありがとう…」

と真っ赤になった顔でお礼をいったかと思つたら

《ぴしゃっ！》

と試着室のカーテンを閉めてしまった。

…中からなんかお経みたいなのが聞こえたのはきつと気のせい  
だと思つ。

・  
・  
・

（結局、衝動買いしちゃった…）

洋服屋さんで駿君に可愛いと言われて以来、頭の中が真っ白にな  
つて、気がついたらスカートを買っていた。

（もともと、何か買うつもりでお金持ってきてよかった…）

そんなことを考えたけど、すぐに頭の中で可愛いと言われたこと  
でいっぱいになる。

「…さん？初音さん？」

ぼーっとしていた私は駿君に呼ばれていることに気づき、慌てて  
返事をする

「あつ、はい！えつと…なんでしょう？」

「なんでしょう、じゃなくて、もう行きたい所はないのか？」

「えつと…ない…です…」（やだ…まだいろいろ行きたい所あったのに…）

そう思ったけど

「なら、もう帰ろうぜ。俺は疲れた」

そう言って駿君はアパートに向かってさっさと歩いていってしまった。

「ところで初音さん、明日も一緒に学校行くのか？どっちでもいいなら、俺は自分のペースで学校行くけど」

アパートに着いて、お互いの部屋に別れる直前、不意に駿君が聞いてきた。

「えつと…じゃあ、せっかくだから一緒に行こう？」

「了解。じゃあ、また明日」

「うん。また明日」

そういつて、私達は別れた。

（…そういえば、男の子に可愛いつて言われたの、初めてだな…）  
部屋に入ってから、自分で買ったスカートの入った袋を見て、ぼんやりとそんなことを考えた。

（中学の時は、男の子なんて話さなかったからな…）

中学時代を思い出すと同時に封印したい思い出までもを思い出しそうになって、頭を抱える。

（嫌…思い出しちゃだめ…）

必死で記憶を押さえ込み、何か気の紛れそうなことをしようと考えて

（歌、歌おう…）

そう思い、好きな曲のメロディーを口ずさんだ。

歌を歌い終わって少し気持ちの和らいだ私は

「明日からも、がんばろう！」

そう呟き、自分を勇気づけた。

不安はまだまだたくさんある。でもきつと頑張ってやって行ける気がした。

#### 第4話 初めての町歩き（後書き）

今回は少し文章が長くなりました。

相変わらずのぐだぐだな文章ですが…

黄色双子はそろそろ出そうかな、と思っています。

## 第5話 ミクとリン（前書き）

第5話です。

いつも通りのぐだぐだな文章です。

それではどうぞ

## 第5話 ミクとリン

「リン。ちょっと待てよ」

黄色い髪をした中学生の少年が、同じく黄色い髪の頭の上にリボンをつけた少女を追いかける。

「そんなに急いでも仕方ないだろ」

少年は少女をたしなめるように言う。

「何言ってるの。レンは善は急げっていうことわざを知らないの？」

リンと呼ばれた少女が少年に向かって言う。

「じゃあ、リンは急がば回っていうことわざを知らないのか？」

レンと呼ばれた少年が反論する。

「とにかく、早めにお家に帰ろうよ！そしたら早く……ってあれ？」

先程まで元気そうな顔をしたリンの表情がみるみる曇っていく。

「リン？どうしたんだ？」

リンの異変に気づいたレンが聞く

「お財布……落つことしちゃった……」



青ざめた顔でリンがそういった。

・  
・  
・  
・  
・

「駿君！一緒に帰ろう！」

ぼんやりとしていた俺は、ミクの声で現実に引き戻された。

「ん？ああ…ミク。もうそんな時間か」

「どうしたの？なんかぼーっとしてたけど？」

ミクが心配そうな顔でこちらを覗き込む。

「別に。たいしたことじゃない」

変に詮索されたくないのので、適当に返事をする。

（昨日やったゲームのヒロインが可愛かったなんて口が裂けても  
いえねえよ…）

「ふーん？まあいいや。早く帰る？」

「おう」

入学式から数週間後、高校生活にも大分馴れてきた。友達らしい友達と言えば相変わらずミクぐらいしかないが、別に問題ないだろう。

大体、友達作りなんて面倒なだけだし。

「ねえ駿君、今日ちよつと公園寄らない？」

昇降口で革靴に履きかえた時、唐突にミクが切り出した。

「ああ？なんで公園なんて行くんだよ？桜はもう散っただろ？」

と俺は聞き返した。

「そうだけど、何となく行きたくなつたから。どうせ駿君も部活入つてないんだから、放課後は暇でしょ？」

確かに、俺もミクも今のところ部活には所属してないから放課後は暇であるが

（早く家帰ってゲームの続き、やりたいんだよなあ…）

昨日やっていたゲームがいい場面に差し掛かっていることを思うと、早めに家に帰りたいかった。

「ん…でもなあ…」

そう渋るものの

「いいじゃん、いいじゃん！なんかジュースおごってあげるからさ  
」！

「う……わかつたよ…」

ここまで言われてしまえば断れない。

以前それでも断ろうとしたとき、ミクに泣きそうな顔をされてしまい、慌てた記憶がある。

（あん時は何を頼まれたんだっけ…）

何を頼まれたのか思い出そうとしたが、わりとどうでもいいので止めた。

「分かったよ…付き合えばいいんだろ？」

「やったあ！じゃあ行こう！」

何故公園に行くだけでそんなに喜ぶのか、俺には分からなかったが、あまり気にしないことにした。

公園に着くと、思った通りと言うか、当たり前だが、桜の花は全部散っていた。

「やっぱり、散っちゃってるね…桜」

ミクが少し残念そうに言った。

「だから言っただろ？なにになんで公園に来たかったんだ？」

「だから言っただじゃん。何となくだよ？」

「…そうか」

（何となくなら連れてくんなよ…）

と思うがそれは口に出さず、公園の奥に歩いて行くミクの後を追いかけた。

「あれ？今日は他にも誰がいるよ？」

しばらく公園を歩いていると、突然ミクが立ち止まり、ベンチを指さした。

「そんなに泣くなよ、リン」

ベンチに座っている男女で、男のほうで女を慰めていた。

「えぐっ…だ、だって…ひっく…財布…落とし…ちゃって…」

どうやら、二人は双子らしい。見た目がそっくりである。全く同じ服装をされたら見分けがつかないだろう。

で、その双子の女の子のほうが泣きじゃくっていた。

「どうしたんだろうね？なんか困ってるみたいだけど…」

双子の様子を見たミクが心配そうに彼らを見てから、こちらを振り返って

「ねえ駿君。助けてあげようよ！」

「駿く〜ん！あつた〜？」

…どうしてこうなった？

学校帰りに半ば強制的に公園に寄らされて、その公園にいた双子が困ってる様子だったから助けようとかミクが言いはじめた結果、双子の姉の方、《リン》とか言う奴の財布探しに付き合わされるはめになった。

（財布落とすとか、どんだけドジなんだ？しかも何故俺まで探さねばなんのだ？）

などと愚痴を心の中で言いながら、とりあえず公園を探してるわけだが

「すみません…わざわざ探してもらって…ひつく…」

まだ半泣きのリンがさっきから頭を下げまくっているので

「別にいいよ。めんどくさいけど、どうせ家にいても暇なだけだし」

という返事を返して、財布探しを手伝った。

「あ！あつた！！駿く〜ん！リンちゃ〜ん！あつたよ〜！」

しばらく探していると、泥だらけになったミクが白い財布を片手に走ってきた。

「リンちゃん！これだよね？」

ミクに財布を手渡され、リンは財布の中身を確認し

「あ！私の財布だ！よかったあ……」

そういつて、よろよろとベンチに座りこんでしまった。

「すみません……リンの奴が迷惑かけちゃって……わざわざ一緒に探してくれて、本当にありがとうございます」

座りこんでいるリンの変わりに弟のレンが礼を言う。

「別にお礼なんて言わなくていいよ。私達はただ手伝いたかったから手伝っただけだし。ね？駿君？」

「ん、まあな」

（よくまあ、人に軽く説教しといて……）

実は

「人助けなんてめんどくさい。俺は帰るぜ」

とミクに言っただけで帰ろうとしたら

「もう！駿君！困ってる人は助けてあげなきゃダメなんだよ？それにここで帰ったら、明らかに差別になるよ？」

などと言いはじめ

「あ？差別なんて…」

「差別だよ！あの子達を助けなくて帰るなら、どうして私の時は道案内してくれたの？あの時は道に迷って困ってた私を助けてくれたじゃん！」

「そ…それは…」

（まさかまだ覚えてたとは…）

あの時は大家さんにパシられたくなくてミクを連れていっただけなのだが、ミクは俺が親切心で助けたものと勘違いしているらしい。だが、変に弁解すると事態が混乱するだけなので

「分かったよ…手伝えばいいんだろ？」

と、若干不機嫌になりながらも手伝うことにしたのだ。

「ほらリン。ちゃんとお礼言えよ」

手伝うきつかけを思い出しているとレンがリンをベンチから立たせているところだった。

そしてリンを俺達の前に連れて来て

「今日は本当にありがとうございました！」

と二人に礼を言われた。

「どういたしまして。リンちゃん、もう財布、落とさないようにね

？」

ミクが笑顔でリンに言う。  
それを見て

（こういつ時のミクの笑顔は、まるで天使だな…）

と思わずにはいらなかったと同時に、リンがミクの笑顔に微かに  
反応したことに気づいたが

（…いかん。何考えてんだ？俺は？女子の笑顔なんて皆同じじゃないか）

ミクの笑顔に見とれていた自分に気づき、慌ててさっき考えていたことを否定しようとしてそんなことはすぐに忘れてしまった。

「…君？駿君？」

心を落ち着かせるのに必死になっていた俺は、呼ばれていることにやっと気づき

「あ、ああ…なんだ？」

と返事をする

「なんだ、じゃないよ。もう夕方だし、リンちゃん達をお家まで送っていいっつ」

「あ！？自分の家にくらい…」

「もう！文句を言っていないでついて来て！」



「はいはい…」

…最近やたらとミクに押されっぱなしな気がする。  
逆らおうと思えばできるはずなのに、何故かできない。

（これが恋とかいう奴か？いや、そんなわけないか）

否定しつつも、その考えが頭の隅に引っかかってとれなかった。

（そういえば、まだ双子の苗字、聞いてなかったな）

不意にそんなことを思い出したが、面倒なので気にしないことにした。

・ ・ ・ ・ ・

私が財布を落としたことに気づいた時は本当に死ぬかと思った。  
体の芯から凍るような感じ。そんな錯覚に襲われた。

（財布の中には、家の鍵とか、昔お姉ちゃんがくれたお守りが入ってたからなあ…）

昔、遊園地でレンやパパとママとはぐれて迷子になった時、私よりちょっと年上のお姉ちゃんが

「迷子になったの？大丈夫！私があなたのお父さんやお母さんを一緒に探してあげる！」

そういつて、一緒に皆を探してくれた。  
しばらくして、皆と会えてお姉ちゃんにお礼を言ったら

「私、初音ミクっていうの！これ、私とあなたのお友達の証のお守り！あなたにあげるね！」

そういつて、ビーズでできた指輪をくれて、どこかに走っていつてしまった。

その時のお守りは今も大切に財布の中にしまっている。だから財布を落とした時、すごく焦った。

でも、たまたま通り掛かった高校生の二人と一緒に財布を探してくれて、見つけてくれた。

（あの時のお姉ちゃん、元気かな…）

ふとそんな事を考える。

すると

「なあ、そういえば君達の名前、苗字は聞いてなかったよな？なんて言っただ？」

と、男の人のほうが私達に聞いてきた。

「あつ…そういえば、ちゃんと自己紹介してなかった。私は鏡音リン。こっちは弟のレン！よろしくね！」

元気に自己紹介をすると、高校生の方も自己紹介をしてくれた。

「俺は天川 駿」

「私は初音ミク！よろしくね！」

初音ミク。その名前を聞いた瞬間、私の体に電撃が走った。

（私は初音ミクっていうの！）

あの時の記憶がフラッシュバックする

「おねえ…ちゃん？」

あの時の人が目の前にいる。そのことで頭がいっぱいになり、その一言が精一杯だった。

「ミク？知り合いか？」

ミクさんも、私の一言で思い出したのか驚いた表情をしていた。

「ねえ、リンちゃん、もしかして私達…」

「うん！昔、遊園地で会ったよ！」

お互いの顔に喜びの表情が浮かぶ

「「久しぶり〜！！」」

そっいつて、私達は抱き合った。

「リンちゃん、元気にしてた？」

「うん！ミクお姉ちゃんは？」

「私も元気だったよ！」

何年前に会ったかもわからない、でも確かにまた会えた。  
こんなに嬉しいことは久しぶりだった。

「お姉ちゃんがくれたお守り、ちゃんと持ってるよ！」

そっいつて、財布からお守りを出して見せる。

「まだ持っていてくれたんだ…嬉しい！」

（運命って、きつとこういうことを言うのかな？）

再会の喜びを私は噛み締めた。

## 第5話 ミクとリン（後書き）

双子登場しました。

ちよっとレン君が影薄いな…

そのうちレン君主軸の話も書こうと思います。

## 登場人物紹介？（前書き）

登場人物紹介その2です。

体調が崩れそうだ…

そろそろ風邪の流行る時期なので、これを読んでくれている皆さんも気をつけてください。

## 登場人物紹介？

一度ここで登場人物を紹介し直そうと思います。

天川 駿

（あまのがわ しゅん）

年齢 15才

性別 男

好きなもの

・ゲーム

・一人でいること

・静かなところ

・四季を感じさせるもの 例）桜の花、紅葉

嫌いなもの

・騒がしいところ

（ただし賑やかなのは大丈夫。要するに繁華街や学校での馬鹿騒ぎは嫌いだ、友達同士のパーティーなど、少人数でわいわいやる程度は大丈夫）

・虫全般

・勉強

性格、その他

基本面倒くさがり。一人が好きで、学校でも基本的に一人でいる。

困ってる人は気分によって助けるなど、気分屋でもある。ほとんどの人に対して冷たい態度をとるが、気を許した相手には優しく接するなど、人見知りが激しい。

鈍感のため、自分が好かれていても中々きづかない。  
ゲームに関してはかなりのもので

「ゲームは遊びじゃねえんだよ！」

と言う程やり込んでいる。そのため、ある程度の実力がある相手なら、格下でも容赦なく勝とうとする。

人見知りが激しいせいで、友達が少なく本人は

「友達なんてそんなに必要ない」

と言っているものの、自分の気づいていないところでは友達を欲しがっている。

初音 ミク

（はつね みく）

年齢 15才

性別 女

好きなもの

- ・ 歌
- ・ ネギ
- ・ 皆で一緒にいること
- ・ 学校行事



嫌いなもの

・虫全般

・怖いもの

・一人ぼっち

・自分が特別扱いされること

性格、その他

性格は底抜けに明るい。

駿とは逆で、一人より誰かと一緒にいることの方が好きである。

また、誰とでも仲良くなるうとするため、大抵の人には男女問わず好感を持たれる。

特に見た目がかわいいため、男子受けはかなり良い。

逆にそれが原因でミクを敵対視する女子も多い。

リンとはまるで本当の姉妹の様に接している。

たまに一人でいることが辛くなり、隣の駿の部屋に押しかけることがある。

どうやら過去のトラウマが原因のようだが：

面倒くさがりながらも、自分のわがままなどに付き合ってくれる駿に好意を抱いている。

最も、駿は全く気づいていないが。

ネギが好き。一日三食、必ずネギを食べる。

また、歌が好きでよく歌っている。

鏡音 リン

（かがみね りん）

年齢 13才

性別 女

好きなもの

・ みかん

・ ミク

・ 体を動かすこと

・ ロードローラー

嫌いなもの

・ じつとしていること

・ 暗いところ

・ 勉強

性格、その他

とにかく動くことが大好きで、頭に付けた大きなリボンが特徴的な活発な中学生。

その活発さ故に、周りが見えなくなつて、トラブルを起こしたり、財布を落とすなどのミスをすることもある。

ミクのことを心から慕っており、お互いに本当の姉妹のような関係でいる。

暴走しやすい所もあるが、あまり気の強くない弟のレンには世話を焼くなど、面倒見のいい面も見せる。

何故かロードローラーを見ると興奮して

「いつか操縦して見たい!」

と言っている。理由は不明。

鏡音 レン

（かがみね れん）

年齢 13才

性別 男

好きなもの

- ・ゲーム
- ・バナナ
- ・お菓子
- ・漫画

嫌いなもの

- ・怖いもの
- ・説教
- ・目立つこと

性格、その他

リンの双子の弟。

リンとは違い、どちらかと言えばじつとしている方が好きなタイプで、よく暴走しそうになるリンのストッパーとしての役目を果たしている。

基本的にしっかりもので、後先考えてから行動しようとする。

しっかりはしているが、こころ一番に弱く、目立つことをする時おどおどしたり、年上の人には萎縮しやすい。

駿に負けず劣らずゲーム好きだが、年の差で駿には勝つことが出来ず、打倒天川を掲げて日々特訓している。

ガクポ

年齢 26才

性別 男

好きなもの

- ・ 茄子
- ・ 時代を感じさせるもの
- ・ 自然

嫌いなもの

- ・ 最新技術
- ・ 都市
- ・ 掟を破るもの

性格、その他

「ござる」などの語尾や、侍を意識させる言動が特徴的な駿とミクのクラス担任。

何故か情報化の進むこの時代に着物を来ていたり、模造刀を腰にさげたりと、端からみればかなりおかしい人。

自然を愛しており、自然破壊をする輩を嫌ったり、都市計画にも反対していたりする。一度は市役所にデモを起こしたんだとか。

ちなみに茄子が大好きで、タッパーに茄子を入れて持ち歩いている。

家には巨大な茄子の置物があり、本人は

《茄子太郎》と読んで大切にしている。  
生徒には

「苗字は秘密」

と言っているが、実は苗字は持っていない。

## 登場人物紹介？（後書き）

思ったより長くなってしまった…

基本的にキャラの好きなものは公式に乗っかってますが、うる覚えなので、ミスがあるかも…

ちなみにガクポの年齢だけは公式を無視して勝手に決めました。すいません

## 第6話 ミクのトラウマ

ピンポーン

ピンポーン

「ああ？誰だこんな朝っぱらから？」

5月3日、土曜日。

ゴールデンウィークに入り惰眠を貪っていた俺をインターホンのチャイムが眠りを妨げた。

ピンポーン

「はいはい、今行きますよ」

ドアを開けるとそこには出掛けるのか、女の子らしい小さなかばんを持ってミクが立っていた。  
それも膨れっ面で。

「もう！駿君！起きるの遅すぎだよ！」

「お前が早いだけだろ…今何時だと…」

言いかけた俺を遮って

「もう10時半だよ！今日はリンちゃん達と遊びに行く約束でしょ！？」

「あ？あれ明日じゃないっけ？」

「え？今日は日曜日でしょ？」

まさかと思い携帯を開いて日付表示を見る。

「…ミク？」

「え、もしかして…」

明らかに焦りの顔になっているミクに追撃をかける。

「今日は土曜日だ」

「……………」

「……………」

沈黙が続く。

「ごめんなさい！」

先に沈黙を破ったのはミクだった。

「全く…いくら楽しみだからって、日付の確認くらいしてくれよ…」

「ごめんごめん。でもせっかくだからどっか行こうよ」

「せっかくの意味が分からないんだけど…」



呆れる俺をよそにミクは

「ねえねえ、どこ行く？」

と行く気満々になっていた。

だがそう何日も外出するのは疲れるし面倒なので

「今日くらいは家にいさせろ。明日出掛けるんだから、明日思いっきり遊べばいいだろ」

と言って部屋に戻ろうとしたら

「じゃあ駿君の部屋にお邪魔するね？」

そういつて勝手に俺の部屋に上がりこんできた。

「なっ…！？誰も入っていいなんて…」

慌てて部屋からミクを追い出そうとしたが

「いいじゃん！どうせ隣なんだし、一度駿君の部屋来てみたかったし」

（要するに、ただ興味本位で入りたかっただけじゃねえかよ…）

そう思いながら、ミクを追い出す方法を考えていたが、すっかり居座る気のミクを見ていると

（…もうどうでもいいや…）

と思えてきたので

「ちよつと着替えてくるから、そこで待っていてくれ。勝手になんか触って壊すなよ！」

そう言つて寢室に入つて着替え始めた。

・  
・  
・

「ここが駿君の部屋かあ……」

リビングにあるソファに腰掛け、私は駿君の部屋を見渡す。

（思ったより綺麗な部屋だな）

正直なところ、もっといろいろ散らかっている部屋だと思っていたから、意外だった。

「ちよつと着替えてくるから、そこで待っていてくれ。勝手になんか触って壊すなよ！」

そついつて、彼は寢室に入つていった。

「さて、テレビでも見ようかな」

テレビを見ようとリモコンを探す。

「あれ？リモコンどれだろ？」

私の部屋にはブラウン管の古いテレビしかないけど、駿君の部屋のものは比較的新しいものだったので、リモコンがどんな形をして

いるか分からなかった。

リモコンらしきものは見つけたもけど、似たような形のものがいくつか並んでいたから、私にはどれがテレビのリモコンか分からなかった。

「これかな？」

とりあえず、一番近くにあるリモコンを手にとってボタンを押した。

「あれ・・・点かないな・・・このボタンかな？」

次々にボタンを押してみるものの、テレビは何の反応も示さなかった。

「ミク？」

「ひゃあー！な、なに？駿君」

突然名前を呼ばれて思わず大声を出してしまった。  
すると

「お前・・・何やってんだ？」

と呆れた顔でこっちを見ながら質問してきた。

「い、いや・・・テレビ見たいんだけど、どれがテレビのリモコンか分からなくて・・・」

そう返事をする、さらに呆れた顔になって

「ミク・・・それはテレビのリモコンじゃなくて、部屋の照明のリモコンだ・・・」

「・・・・・・・・え？」

「え？じゃなくて、お前が持つてるそのリモコンは、部屋の電気を点けたり消したりする時のリモコンだ。しかもそれ電池入ってないし・・・」

「またもや沈黙が流れる。私は恥ずかしくて死にたくなった。きっと私の顔は今真っ赤になっているだと思う。」

「テレビのリモコンは、食卓の上に置いてあるよ。ちゃんと周りを見る」

「そう言われ、食卓に目を向けると確かにそれっぽいリモコンが置いてあった。」

「で、何見るんだ？」

「駿君がいすに座ってリモコンを操作する。」

「別に何を見ようって訳じゃないんだ。駿君来るまで、暇つぶししようと思って」

「ふん・・・」

「それ以上話すこともなくて、なんだか気まずい雰囲気になってしまった。」

「ね、ねえ・・・やっぱりどこかに・・・」

「行かないって言ったろ。俺の部屋にはお前が好きそうなものなんて置いてないだろうから、退屈なら自分の部屋に戻るか、一人でどこかに行ってくれ」

「・・・う」

気まずいので、どこかに出掛ければと思ったがやっぱり断られてしまった。

(でも・・・一人は嫌だ・・・)

本当は、今日が土曜日だということは知っていた。

でも今日は思い出したくない昔の時の夢を見て目が覚めて、すごく嫌な気分でも一人では過ごしたくなかった。

だから、曜日を間違えた振りをして駿君の部屋に上がらせてもらった。

「なあミク」

「なあに？」

テレビを見ながら駿君が私を呼んだ。

「お前、彼氏とかはいないのか？」

「えっ・・・い、いや・・・私はいないよ？」

突然すぎる、しかも絶対に聞かないだろうと思っていた人の口か

ら出てきた質問に頭が真っ白になる。

「じゃあ好きな人は？」

「え・・・そ、それは・・・」

どうして彼はこんな質問をするのだろうか？動揺でほとんど動かない頭を動かして必死に考えを巡らせる。

「どっちにしろ、そういう人がいるなら自分の部屋に戻つとけよ。流石に見られないとは思うけど、もしそういう人に俺の部屋からミクが出てくるところなんて見られたら、誤解されるぞ？」

彼の質問した理由がようやく分かった。あの質問は駿君なりに気を利かせたつもりなんだと思う。

「す、好きな人なんていないよ・・・？」

自分の気持ちを悟られないように、できる限り自然に返事をした。

「ふーん？ならいいけど」

そういつて駿君はまたテレビを見ることに専念した。

（好きな人・・・か。目の前にいるのにな・・・）

伝えたい、でもまだ伝えるまでの勇気がない。それに、まだ漠然とした気持ちだから本当に好きなのかも分からない。そんな自分が少し嫌になり、そつと溜息をついた。

それからしばらくなんとなく駿君と一緒にテレビを見て、お昼ご飯と一緒に食べて、一緒に最近のこととかを話したりして時間を過ごした。

「でね、その猫、私のほうに寄ってきて体を擦りつけてきたの!! もうすごく可愛くてさ!」

「ああ・・・そういう猫は確かに可愛いな」

「でしょ? 犬も可愛いけど、私は猫派かな」

「犬舐めんなよお前。犬だってめっちゃじゃれて来ると可愛いぞ!」

「だって犬は顔とか舐めてくるからさ・・・ちょっと苦手っていうか・・・」

「なるほど・・・」

自分でもこんなに男の子と喋るなんて初めてだと思った。それに、駿君と意外にも共通の話題があることに驚いたし、同時になんだか嬉しかった。

「ねえ、そういうば駿君は彼女とか好きな人っているの?」

さっきの質問を今度は私がしてみた。

「あ? いるわけねえだろ。めんどくさいし、そもそもいないし」

「そっか・・・」

彼女なんていらぬ。その一言が、少しだけ心に刺さった。

「そついえば俺も聞きたいことあるんだけど？」

「えっ…何？」

今度は何を聞かれるのかと、少し不安になったので

「す、スリーサイズと体重は教えないからね！」

と先手を打つておいた。

「人を変態みたいな風に言うな。大体そんなの聞いてなんの得になるんだ？」

「え？気にならないの？」

「聞いても分からんし、興味ない。っーか話そらすな」

少しイラッとしたように駿君が言ったので

「ごめんごめん。で、聞きたいことって？」

「ん？ああ…なんか最近、お前一人でいるのを避けてる気がするんだけど、大丈夫か？」

痛い所を突かれた。

最近、確かに誰かと一緒にいて一人になる時間を極力減らそうと  
していた。



（まさか気づいてたなんて…でも心配はかけたくない…）

図星だったけど、駿君に心配をかけたくないから

「気のせいだよ！大丈夫、大丈夫！」

そういつて、ごまかした。

「そうか…ならいいや。変なこと聞いたな。忘れてくれ」

「ごまかせないと思っていたが、なんとかごまかせたようなので少し安心した。」

「じゃあ、私そろそ、ろ…？」 部屋に戻ろうとした時、視界が歪んで意識が遠くなっていった…

・  
・  
・

なんだかんだで一日ミクは俺の部屋に居座っていた。

（まあ、思ったより会話の内容が尽きなかったな）

そんなことをぼんやり考えていると

「じゃあ、私そろそ、ろ…？」

ミクが自分の部屋に戻ろうとした時、よろめいたと思ったら

「あ…れ…」

そのまま倒れてしまった。

「お、おい！ミク！？」

倒れたミクに近寄る。

どうやら気絶しているみたいだった。

「まったく…世話の焼ける…」

とりあえず、ミクをおぶってミクの部屋に向かう。

ミクのかばんに入ってた鍵で玄関を開け、ミクには悪いが勝手に上がりこませてもらい寝室に向かう。  
そしてベッドに寝かせた。

（体調悪かったのか？）

明日のこともあるので、一応額に手を当ててみる。

（熱は…ないのか。なら何が…）

とりあえず自分の部屋にまだ置いてあるミクのかばんを取りに戻った。

（あいつ、持病でも持ってたのかな…）

ミクのかばんを持って、ミクのところに帰りながらそんなことを考える。

寝室を覗くとまだミクは気を失っているままのようだった。

「……………」

明日もあるし、なんか心配なので、とりあえず様子を見ることにした。

・  
・  
・

「ミク！危ない！」

お母さんが私を突き飛ばす。

キイイイ！！

「キヤアアアア！」

鈍い音と共に目の前でお母さんが宙を舞い、地面に叩きつけられる。

「お…母さん？」

何が起こったのか分からない。周りの人がパニックになったり慌てている。

「ねえ、お母さん！」

倒れた母に呼びかける。でもいくら呼びかけても返事は帰って来ない。

目の前が真っ暗になる。

次に目に飛び込んで来たのは、学校の風景だった。

「ねえ聞いた？リムジンでいつも登校してるの、初音さんらしいよ？」

「あゝ知ってるよそれ。やっぱりお金持ちは違うね」

「だよね。しかもなんかいい子ぶっててムカつくし」

女子生徒の話し声が聞こえる。

これは夢。封印したい記憶の夢。

（嫌…止めて…）

「…ク！おいミク！」

聞き慣れた声で目が覚める。

「ん…あ、あれ…駿…君？」

目の前に心配そうな顔をした、駿君の顔があった。

「大丈夫か？かなりうなされてたぞ？」

「あ…うん…ごめん…」

思わず彼に向かって謝る。

「謝んなくていいけどさ。まあいいや、ココア飲むか？」

そういつて、駿君はコップを差し出してくれた。

「ありがとう…」

そういつて差し出されたコップを受け取り、少しだけココアを飲んだ。

「…おいしい」

「そりゃよかった」

彼もココアの飲み一息ついた。  
今日三度目の沈黙。

「……………」

「……………」

今度は先に沈黙を破ったのは駿君だった。

「明日、出掛けられるのか？」

口を開いた駿君がまず明日のことを聞く。  
当然だろう。突然目の前で倒れ込まれたら、私だって同じことを聞くと思う。

「うん。大丈夫。ちょっと最近寝不足気味で、ちょっと疲れたただけだから…」

心配かけないように、嘘をつく。

「そうか…まあ無理はすんなよ？」

とは言えやはり心配をかけてしまっているのだと思う。  
少しだけ、駿君の顔色が暗くなった。

「心配してくれて、ありがとう。でも私は大丈夫だから」

そういつて、うまく出来てるか分からないけど笑顔を見せた。

「ふ…全然大丈夫そうな顔してないんだけどな。ま、無理するだけの気力があるなら大丈夫だろ。明日、遅刻するなよ？」

そういつて、彼は部屋から出ていった。

(……………いつか話すべきなのかな)

自分の持つトラウマ。それとはきつと向き合わなければならないんだと思う。

でも今は、今だけは忘れたかった。

(明日は皆に迷惑かけないようにしなきゃな…)

そう決意して、明日の準備を始めた。

## 第6話 ミクのトラウマ（後書き）

会話がめっちゃ多い気がする。

まあ例によってぐだぐだです。

改めて、小説を書くのが難しいことを実感しました。

第7話 皆とお出かけ 前編（前書き）

第7話です。



## 第7話 皆とお出かけ 前編

「リン！起きろ！遅刻するぞ！」

「んゝ…後3分だけ…」

5月4日、日曜日。

今日はミク姉ちゃんや駿兄ちゃんと遊びに行く日だ。

遊びに行こうと言いはじめたのはリンなのだが、当の本人はまだ起きようとしてない。

（言い出しつpeg遅刻は洒落にならんだろ…）

そんな不安をよそにまた爆睡しそうなリンを

「ほら！起きろ！今日はミク姉ちゃん達と遊びに行くんだろ？」

そういつて布団を剥ぎ取った。

「きゃっ！ちよつとレン！何すんの！」

「文句言っでないで出掛ける準備しろ。俺達が遅刻するのはまずいだろ」

そうリンに向かって言うと、リンは

「遅刻って、どっか行くんだっけ？」

と、キョトンとした顔で聞き返して来た。

（…人の話を聞いてなかったのか？）

また同じことを言わなければならないのは気に入らないが、言わないと動かなそうなので

「今日はミク姉ちゃん達と遊びに行く予定だろ！」

と答えると、リンが

「わああああ！忘れてたあああ！」

と大声を出してベッドから飛び起きた。

「っ！うるさいな。朝から大声だすんじゃないやねえよ…」

耳を塞いだ俺に

「今日何時集合だっけ！？」

と慌てた様子のリンが聞く。

「10時。ちなみに今9時15分」

そう答えると

「集合場所どこだっけ！？」

とさらに質問してきたので

（言い出しっぺなんだからその辺記憶しとけよ…）

と内心想いつつ

「有賀島町駅の前だよ。ほら、急いでしたくしろ」  
とリンにいった。

それから30分後

「「行つてきまゝす」」

二人で声を揃えて言いながら家を飛び出す。

「ほらレン！急ぐ！」

走り出したリンが俺に向かって言う。

「リン！ちゃんと前を見て走れよ！」

「だってレンが遅いんだもん！」

確かにリンの方が足も早いし体力もある。

…運動で女に負けるのは男としてどうかと思うが、俺はリンと違って運動は好きじゃないから別にいいと思う。

必死に走ること約10分。ようやく駅に着いた。

「はあっ、はあっ、はあっ…あ、あれ…お姉ちゃん達…まだ…来ない？」

リンに言われて辺りを見回す。

「はあっ…はあっ…確かに…あ…来た！」

俺達の来た方向とは反対側の道からミク姉ちゃんと、駿兄ちゃんが走って来た。

「はあっ…はあっ…ごめ〜ん！待った？」

息を切らしながらミク姉ちゃんが言う。

「うっん！私達も今来たところだよ！」

「ほんと？よかった…」

待たせていると思っていたのか、リンの言葉を聞いてミク姉ちゃんは少し安心したみたいだった。

そこに

「でもお前がもっと早く準備すればここまで急がなくてよかったんだからな」

と駿兄ちゃんが釘を刺す。

「むう…しょうがないじゃん！寝坊しちゃったんだから…」

「…はいはい」

（駿兄ちゃんも待たされてたんだ…）

心のなかで、お互い女に振り回されてるな、と思った。

「お姉ちゃん！早く行こうよ！」

すでに改札の前に立っていたリンが叫ぶ。

「ごめん！今行くー！さあ、二人とも行こ！」

「はいはい」

そう言って、俺達は駅の中に入っていた。

「なあ、今日はどこ行くんだ？」

電車に乗って少し経った頃、駿兄ちゃんが俺に聞いて来た。

「聞いてないの？」

質問を質問で返す。

「いや、聞いたけど何言ってるかよく分からなかった」

「ふーん…今日は遊園地に行くんだよ」

まあ俺達がこれから行く遊園地は「有賀島アミューズメントワンダーランド」という知らない人が聞いたら呪文にしか聞こえない名

前なので、駿兄ちゃんは知らなくても無理はないだろう。  
…ゲームの知識しかなさそうだし。

「レン。お前、今俺がゲームのことしか分からない奴だっと思った  
る?」

俺の心を見透かしたような言葉に思わず

「そんなわけねーじゃん!!」

と大声で反論してしまった。

周りの人の視線が一気に俺に集中する。

「凶星か。レン、後で覚悟しとけよ?」

周りの視線にさらされて、頭が真っ白になった俺に駿兄ちゃんが追  
撃をかけるように言った。

・  
・  
・  
・  
・

電車の中でレンに行き先を聞いて、鎌をかけてみたら凶星だった  
らしかったので、地味な死刑宣告的なものをした。

(分かりやすく面白いな!)

心の中で笑いつつ、隣にいるミク達の方を見る。

「ねえねえお姉ちゃん。今日はどんなアトラクションに行く!?」

「んゝ…何って言われても私、引っ越してきたばかりだからどんなのがあるか分からないよ…」

リンの質問に答えられないミクは少し申し訳なさそうな顔をした。

「あ、そつか…んゝとじゃあね、お姉ちゃんジェットコースター乗れる？」

リンがミクに聞く。

「んゝ…実は私、ジェットコースター乗ったこと無いんだ…」

ミクの答えにリンは

「えゝっ！お姉ちゃんジェットコースター乗ったこと無いの！？」

と、大声で聞き返す。

「ちよっ、リンちゃん！声大きいよ！」

ミクが慌てて制止するが、またも周りの視線が俺達に集中する。

（この双子…とっさのポリウム調節の概念はないんだな…）

先程のレンの事を思い出し、少しだけ溜め息をついた。

が決定的にリンがレンと違うのは、周りの視線が自分に集中しようがお構いなしに大声で話すことだった。

「ジェットコースター乗ったこと無いなんて…！お姉ちゃん人生の

5分の2は損してるよ!」

（それはないだろ。ていうか5分の2って大分中途半端な数だしだな…）

「え、そんなに面白いの？ジェットコースターって」

ミクがリンに質問する。

「そりゃあもう！乗れば分かるよ!」

乗るのが待ちきれないと言った表情でミクの質問に答えるリン。  
その時

「わりいけど俺はパスな」

とレンが言った。

「え〜っ！なんで！？レンも一緒に乗ろうよ！楽しいじゃん、ジェットコースター」

だがレンは

「断る。だってあれただ高速で動いてるだけの乗り物じゃん。だったら俺はスポーツカーで飛ばした方が楽しいよ」

とばっさり切り捨てた。  
すると

「レンの意地悪！そうやって屁理屈ばかり言って！せっかく皆で



来たのに…」

とリンが目には涙を浮かべてレンを睨みつけた。そして力なく椅子に座りこんでしまった。

「リ、リンちゃん…大丈夫だよ！レン君も悪気があって言った訳じゃ…」

とミクがなだめるが

「レンなんて知らない！」

と言ってシクシク泣き始めてしまった。

「おいレン。流石に今のは言い過ぎじゃないのか？」

俺もレンに声をかける。

だが

「別に…このくらいいつものことだから」

と言ってそっぽを向いた。

(…なるほど。そういうことか…)

レンがあれだけ言った理由が分かり、思わず俺はにやけてしまった。

そしてレンに

「おいレン。お前、ジェットコースターに乗るの、怖いんだろ？」

と言ってやった。

「なっ…！そんなわけねーじゃん！あ、あんなの怖くも何とも…」

言いかけて、俺の策に引っ掛かったことに気づいたようだ。  
追撃をかけるように俺が

「おいリン。レン、ジェットコースター乗るってよ」

とまだ啜り泣きをしているリンに声をかける。

「ほんと？レン…一緒に乗ってくれるの？」

と、まだ涙を浮かべながらレンに聞く。

「お、おう…乗って…やるよ」

流石にもう断れないと思ったのか、承諾するレン。

（ほんと、分かりやすい双子だな）

またそんな事を考えながら、ミクの方を見るとVサインが送られてきた。

とりあえずVサインを返す。

そして

「女ってのはな、泣かせない方がいいんだぜ？後ですげえしっぺ返ししてくるから」

と半ば放心状態のレンの肩を叩いた。

・ ・ ・ ・

電車を降りてから私達はとりあえずトイレ休憩をとることにした。  
用を済ませ手を洗っていると、リンちゃんが横で

「お姉ちゃん、さっきはごめんね。レンったらほんとにわがままな  
んだから」

と謝って来た。おそらく、ジェットコースターの件の事だと思う。

「大丈夫だよ。でもレン君、一緒に乗ってくれるって言うてくれて  
よかったね！」

そう私が言つと、リンちゃんは満面の笑みを浮かべて

「うん！さあ早く行こう！きっと二人とも待ってるよ！」

そついつて私の手を引いて歩きはじめた。

トイレから出ると既に男子二人は改札の前で待っていた。

「お、やっと来たか」

私達に気づいた駿君がレン君との会話を止め、ポケットから切符  
を取り出し改札を抜けた。

「さあ、早く行こうぜ。俺、腹減っちまったよ」

いつもより少し明るい口調で言う。

「リンもお腹すいた〜!」

今日は集合が10時で電車には30分くらいしか揺られてないから、まだ10時30分くらいにしかなくてないはず。

「まだお昼には早いんじゃない?」

そういつて、腕時計を見る。

(うん…まだ10時35分だね。私はまだお腹空かないな)

「リンは今朝飯まともに食ってなかったしな」

レン君が呆れたように言った。

「だって寝坊しちゃったんだからしょうがないじゃん!」

リンちゃんは膨れっ面をして言い返す。

「あれ?じゃあ駿君も今日寝坊したの?」

こんな時間にお腹が空くなら駿君も朝飯食べてないのだと思い、質問する。

「いや。今日は8時に起きたよ。起きてすぐ飯食ったから消化しきつちまったんだろ」

若干、駿君の顔に

（残念でした）

みたいな感じの表情が浮かんでちよつと悔しくなった。

（私、今日は9時20分に起きたからなあ…）

朝ご飯はとりあえずネギまるごと一本を焼いて食べた。家を出た時

「…またネギ焼いてたろ？」

と駿君に言われてどきつとした。

（お昼、ネギ抜きにしてみようかな…）

またお昼にネギを食べたら、多分駿君に生暖かい目で見られると思う。流石にそれはいろいろとつらい。

「まあ、でもたまには早めにお昼食べてもいいか。ねえ、皆何食べたい？」

そういつて、意見を聞いてみる。

「私、ハンバーグがいい！」  
と、リンちゃん。

「僕は何でもいいよ」

「俺も食えりや何でもいいや」

レン君と駿君は何でもいいようなので

「じゃあ、遊園地の近くのアミレスでいい？」

「おう」

「うん！やったあ！」

「はい」

ということでファミレスに行くことになった。

「いらっしやいませ！何名様ですか？」

「4人で〜す！」

リンちゃんが元気に答え、席に案内される。

流石にまだお昼には早いから他に来ている人は少なかった。

「何にしようかな…」

メニューを見て悩む。今開いているページにはネギたま丼が載っていた。

（でもなあ…）

ちらつと向かいに座っている駿君を見る。

もう決まったのか、既にメニューは見ていなかった。

（…たまには違うもの頼んでみようかな）

そう思い、私は別のページを開いた。

「皆決まった？」

リンちゃんが皆に聞く。

「決まったよ」

「おう」

「決まった」

全員が決まったのを確認すると

「じゃあ私がピンポン押すね！」

と、押そうとした時

「俺もやりたい！」

とレン君が言いはじめた。

「やだ！私が押すの！」

「いつもリンばかり押してるだろ！」

「いーじゃん！これは私の仕事なの！」

また喧嘩っぽくなって来ちゃったから

「ちょっと二人とも…落ち着いてよ。ここは公平にジャンケンすれば…」

そう言いかけるとほぼ同時に

「ジャン…ケン…ポン!!」

とジャンケンをしていた。

「やったあ!私の勝ちい!」

「くそ〜!ずるいぞリンばかり!」

ジャンケンに勝ったリンちゃんは文句を言うレン君をよそにボタンを押した。

「ご注文はお決まりなされましたか?」

「えっと…目玉焼きハンバーグを一つ!」

「目玉焼きハンバーグを一つ」

店員が復唱する。

「マルゲリータを二つ」

どうやら男子は同じ物を頼んだみたいだった。



「あとミートソーススパゲッティを一つください」

「かしこまりました。ご注文は以上でよろしいでしょうか？」  
するとリンちゃんが慌てて

「あっ！ドリンクバーを四つください！」

と追加した。

「かしこまりました」

そういつて店員は店の奥に入っていった。

「私、ジュース持って来る！」

リンちゃんが勢いよく立ち上がる。

「あ、じゃあ私も行く。二人とも、何がいい？」

男子二人にそう聞く。

「僕はコーラで」

とレン君。

「何でもいい」

と駿君。

「分かった」

そういつて私達はドリンクバーに向かった。

「あゝ美味しかったあ！」

リンちゃんが満足げに言う。

「ほんと、美味しかったね」

私もリンちゃんに同意した。

「さあ、飯も食ったし、一息着いたら遊園地行こつぜ」

そういつて駿君は出発の準備を整えた。

「うん！行こ行こ！」

リンちゃんが元気に返事をする。

「リン、あんまりはしゃいで迷子になるなよ？」

レン君がからかうように言う。

「もう迷子になんかならないもんね」

そういつて、リンちゃんはレン君に向かってあっかんべーをした。

## 第7話 皆とお出かけ 前編（後書き）

学校で疲れてしまっただけなかなと思うように執筆作業が進まないです…

ちよつとこの先不定期更新になりやすいかもしれません。  
部活の大会やテストなんかの予定が詰まってるので…

学校爆発しろー！

## 第8話 皆とお出かけ 中編

「早く早く〜!」

遊園地のゲートを抜けてすぐに私は少し走って皆を呼ぶ。

「リン!あんまり離れるなよ!」

とレンが叫ぶ。

「大丈夫だって〜!」

そう返事をして、再び走ろうと前を向こうとした時

《どん!〜!》

「きゃっ!〜!」

「おっと!」

誰かにぶつかってしまった。

「い、ごめんなさい!」

慌ててぶつかった相手に謝る。

「いやいや、大丈夫だよ。でも、ちゃんと前を見て歩いてね?」

と言って許してもらえた。

「ほらー！だから言ったる？あまり離れるなつて。すみません！連れが迷惑かけて」

私に駆け寄つて来たレンも一緒に謝る。

「ははは！そんなに謝らなくていいよ」

私が顔を上げると、そこには青い髪をした大学生くらいの男の人が立っていた。

もう大分暖かいというのに何故かマフラーをしていて、まだそこまで暑くもないのに片手には大量のアイスを持っていた。

(… かつこいい)

見た瞬間そう思った。

「カイト！何してんのよ！早く行くわよ！」

「はいはい、今行くよ」

ほんの10メートル程先に彼の連れの人達らしき人がいた。

一人は赤が基調の服を着た茶髪でショートヘアの女の人。

もう一人は黒が基調の服を着た腰まであるピンク色の髪をした女の人だった。

(二人とも胸おっきい…)

どちらも美人だったがそれよりまずそこに目が行ってしまった。

（うらやましいなあ…）

そんなことを思っていたら

「じゃあ、俺いくよ」

そういつてカイトと呼ばれた男の人は行ってしまった。

「あ…」

私はしばらく頭が動かなくてその場に座り込んだままだった。

「…ン！リン！大丈夫か？」

ふつと我に帰るとレンが呼んでいた。

「え…あ…ごめん。ぼーっとしちゃった」

「おいおい…しっかりしてくれよ…」

レンが呆れたように言う。

「うるさいなあ。私だってたまにはぼーっとするの！」

頬を膨らませて言い返した。

「はいはい…で、まずどこから行くの？」

と、レンに聞かれる。

「もちろん！ジェットコースター！」

答え、私は立ち上がって歩き出す。

「いきなりかあ……」

レンがばやくのが聞こえた気がするけど、気にしない！

「お姉ちゃん！早く行こー！」

後ろを向いてお姉ちゃんを呼ぶ。

「あ、リンちゃん待って！」

ジェットコースターの前まで来て、列の一番後ろに並ぶ。

「うわあ……結構並んでるね……」

お姉ちゃんが圧倒されたように言う。

「30分待ちだよ。結構待つな」

案内板を見て駿お兄ちゃんがお姉ちゃんに向かって言う。

「30分も待つんだ……私、遊園地に来たのかなり久しぶりだからこんなに並ぶなんて忘れてたなあ」

少しげんがりしている二人に私は

「もう！二人ともこのくらいでげんなりしてちゃダメだよ？」

と言ってあげる。

「はあ？30分も待つのにこのくらいはないだろ……」

お兄ちゃんが呆れたように言う。

「30分なんて全然空いてる方だよ？いつもは100分とか平気で並ぶんだから！」

そういった私の答えに

「100分も待つのか！？」

と、二人でハモっていた。

（この二人、もしかしてくつついてる？）

あまりに綺麗なハモリだったので、思わずそう思った。

そんなことを言っているうちに、乗る順番が近づいてきた。

ジェットコースターに乗る時の注意アナウンスが流れる。

《この度はこのアトラクションにおいていただき、真にありがとうございます。本アトラクションは…》

もう聞き慣れたアナウンスなので、聞き流す。

そして私達が乗る番がやって来た。



「お姉ちゃん！一緒に乗ろう！」

そっいつてお姉ちゃんの手を引く。

「う、うん…一緒に乗ろう！」

そっいつたお姉ちゃんの顔はちょっと不安そうだった。

「お姉ちゃん、怖い？」

シートに座りながらお姉ちゃんに声をかける。

「う、うん…なんかさっきから悲鳴みたいなの聞こえるし…」

不安そうな顔をしてお姉ちゃんが答える。

「大丈夫だよ！怖かったら私の手を握っていいからさ！」

私がそう言つと、コースターが動き出した。

左手に温もりを感じたから、ふと見るとお姉ちゃんが私の手を握っていた。

私もお姉ちゃんの手を握り返す。

動き出してから少し経った頃、コースターのスピードが落ちてきた。

「も、もう終わり？」

お姉ちゃんが私の手を握りながら聞いてきた。

「うっん。これから急降下だよ?。」

そう答えると

「え…?やだ…怖いよ…」

そういつてお姉ちゃんの顔がもつと強張った。

「大丈夫だつて!ほら、私の手を握ってれば安心でしょ?。」

そういつてお姉ちゃんの手を握る。

そんなことをしているうちにコースターは上り坂を上りきろうとしていた。

私の手を握るお姉ちゃんの手の手力が一層強くなる。

「じゃあお姉ちゃん、手を挙げるよ!!!」

そういつて私は手を思いつ切り上に挙げる。

「えっ…ちよつとリンちゃ…きゃあああ!!!!!」

お姉ちゃんが言い終わる前にコースターは急降下を始めた。

降下した時のスピードを生かしてコースターはまた上り坂を登ってさらに急降下する。

「うわああああ!!!」

急降下の途中、後ろでレンが絶叫しているのが聞こえた。

（レン、ジェットコースターが怖いから乗るの嫌だったんだ）

電車の中での出来事を思い出し、その時のレンの態度に納得した。

そんなことを考えているうちにもコースターは急カーブや急上昇、急降下を続けていてそのたびに後ろでレンが絶叫し、お姉ちゃんは強く私の手を握り締めていた。

「ははははっ！！おいレン！そんな下向いてないでもっと景色見ようぜ！！」

後ろからお兄ちゃんの声が聞こえた後

「嫌だ！！僕はこの体勢が一番楽なんだ！！」

と拒否をする声が聞こえたけど

「硬いこというなよ！！景色きれいだぜ！」

と言われていた。

後ろでそんなことをしているうちにスピードが落ちて、コースターはまた上り坂を登り始めた。

「リ、リンちゃん…まだ終わらないの…？」

横にいるお姉ちゃんが震えた声で聞いてきたから

「大丈夫だよ。次で最後だから」

と答えると

「よ、よかった…」

と少し安心した表情をしたけど、すぐにそれもなくなくなった。だって上り坂が今までで一番長かったから。でも最後に一番凄いのをとっておくのは当たり前だと思う。

「リンちゃん…」

お姉ちゃんが泣きそうな顔でこっちを見る。

「大丈夫だって！」

そう励まし、クライマックスに備えた。

コースターが坂のてっぺんまで登りきりそして急降下を始めた。

「いえーい！！」

私は両手を挙げて思いつ切り風を受ける。

急降下中に感じる無重力感。

ほんの一瞬だけど、空を飛んでるような気分になれるその一瞬が、私は好きだった。

急降下が終わり、コースターがスピードを落としてゆっくり走る。

「お姉ちゃん！どうだった？」

いいながら、隣にいるお姉ちゃんの方を向く。

「ひつく…う、うん…えぐっ…怖かった…」

よっぽど怖かったのか、お姉ちゃんはちょっと泣いていた。

「そっか…ごめんね…無理につき合わせちゃって…」

少しだけ申し訳ない気持ちが湧いた。でも

「ううん…大丈夫…怖かったけど、リンちゃんとならもう一回乗ってもいいよ」

と半泣き顔で笑いながらそういつてくれた。

（私が泣きそうだよ…）

お姉ちゃんの言葉で私が泣きそうになった。でもコースターが止まったのでとりあえず降りる。

「おいレン。大丈夫か？」

ジェットコースターから出てきてふと後ろを振り向くと、半分魂が抜けてしまったような顔をしたレンがふらふらした足取りで出てきた。

「あははっ！レン、ゾンビみたい！」

そう笑うと

「誰のおかげでこんなになったと思ってるんだー！」

と逆切れをされたけど

「レン。お前も男ならジェットコースターくらい乗れるようになれ」  
とお兄ちゃんに言われて黙りこんじゃった。

それからいろんなアトラクションを回った。  
コーヒーカップに乗ってお姉ちゃんと一緒に目が回って男子二人に  
呆れられたり、ゴーカートに行って子供みたいにはしゃぐレン達に  
呆れたりした。

「うふふつ。駿君達、子供みたいだね」

はしゃぐレン達を見てお姉ちゃんが笑う。

「ほんとだね。もう中学生と高校生なんだから、あんなにはしゃが  
なくてもいいと思うんだ」

私がそういうと

「きつと私達女の子には理解できないんだよ。男の子がぬいぐるみ  
や人形に興味がないのと一緒にでさ」

とお姉ちゃんが言った。

「そんなもんかなあ」

そう返事をする。

ちなみに私達はゴーカートには乗らないで、近くのベンチに座ってジュースを飲みながら色々な話をしていた。

「・・・でね、私その時ファインプレーしたの!」

「すごい!!流石リンちゃんだね!」

今は中学校であつた出来事をお姉ちゃんに話してて、その時の私の武勇伝を聞かせていた。

「私は部活に入っていないからなあ・・・リンちゃんみたいな活躍はしてないや」

私の話を聞いてお姉ちゃんがそう言った。

「えっ?お姉ちゃん帰宅部なの?」

私の質問に

「うん。なんだか私に合いそうな部活、見つからなくて」

そういつて少しお姉ちゃん表情が暗くなった。

「だ、大丈夫だよ!帰宅部だってちゃんとした部活だと思うよ!<俺には帰る家がある!帰宅部員募集中!>みたいな言葉もあるくらいだし!」

必死でフォローしようとする私に

「ふふっ!ありがとリンちゃん」

と笑顔で返してくれた。

「ところでさ、私さっきからずっと気になってたんだけど」

私がそういうと

「気になってること？なぁに？」

とお姉ちゃんがきょとした顔でこっちを見る。

「ミクお姉ちゃんと駿お兄ちゃんって付き合ってるの？」

そう質問した瞬間

「えっ・・・いや・・・わ、私達はそんな関係じゃないよ？」

とお姉ちゃんは否定したけど、顔は真っ赤になっていた。

「じゃあ、お姉ちゃんはお兄ちゃんのこと、好きなの？」

ちよっと追撃をかけるように聞いてみる。

「えっ・・・えっと・・・それは・・・その・・・」

お姉ちゃんは完全にパニックになっているみたいで、うまくしゃべれてなかった。おまけにさっきよりも顔が真っ赤になって

（これ、完全に凶星なんだな・・・）



と思うしかないようなリアクションだった。

「あははっ！お姉ちゃん、もう完全に好きなんだね！」

そうからかうように私が言つと

「えっと・・・いや・・・あうう・・・」

もはや拒否をするということにまで頭が回らないのか、お姉ちゃんは顔を真っ赤にして下を向いていた。

「お、いたいた。お待ちせ」

そこにちょうど男子二人が帰ってきた。

「ん？ミク、顔真っ赤だぞ。大丈夫か？」

まだ顔を真っ赤にしたまま下を向いていたお姉ちゃんに気づいてお兄ちゃんが声をかける。

「ひゃあ！え...う、うん...大丈夫だよ！」

「ほんとか？熱でもあるんじゃないのか？」

そう言われたお姉ちゃんは

「だ、大丈夫だって！そ、それより次どこに行く？」

と無理矢理話題を変えようとした。

「.....」

もう面倒くさくなったのか、お兄ちゃんはそれ以上追及しなかった。

「あ、じゃあそろそろ日も暮れてきたから早めに飯食べない？」

とレンが言ったので

「そ、そうだね！そうしょっか！」

助かったと言わんばかりの表情でお姉ちゃんが賛成して

「そうと決まれば早速行こう！」

と、そそくさと歩いて行ってしまった。

「あつ、お姉ちゃん待って！」

そういつて私はお姉ちゃんを追いかけた。

## 第9話 皆とお出かけ 後編

「で、何食いに行くんだ？」

飯を食いに行くって話になったはいいが、どこで何を食べるかは全く話してなかった。

（さっきからミクの様子もなんか変だしな…）

そんなことを考えていると

「カレーでいいんじゃない？」

とミクが言った。

「私、カレーがいい！」

「僕もカレーがいいや」

どうやら双子はカレーがいいみたいなので

「じゃあカレーでいいか」

と俺も同意する。

「じゃあカレー屋さん行こっか？」

そういつてミクは歩き出す。

（まあ、様子が变かどうかなんて気にしないでいいや。面倒くさいし…）

そう思って、皆の後をついていった。

「思ったより混んでるねえ…」

カレー屋に着いたのはいいが、俺達が想像していたより多くの人  
が既に店に訪れていた。

「私、席探してくるね！」

そういつてリンは店の奥の方に歩いて行った。

俺も空いている席がないか店を見渡すが、どの席も他の客が座つ  
ており、空いている席は見当たらなかった。

「この店は無理かな…」

そう呟いた時、

「みんな〜！あつたよ〜！」

というリンの声が聞こえてきたので、そっちの方に向かって歩く。  
少し店の中を歩くと、リンが手招きをしていた。

「お、確かにちょうど四つ席が空いてるな。RING」だ」

そういつて俺は席に着く。

が、褒められたリンはきよとした顔でこちらを見て

「G」って…何？」

と聞いてきた。

（しまった…こいつにはわかんないのか…）

思わずネトゲで使う言葉を使ってしまったことに気づき、自覚はしているがゲーム中毒の自分に少しげんなりした。

「G」ってのはグッジョブの略だ。要するによくやったって褒めてるってことさ」

若干専門用語を使ってしまったことを反省しながら説明をする。

「へえ〜そういう意味なんだ。私、英語苦手だからなあ」

納得したリンがそう呟きながら席に着いた。

とりあえず用語の説明も終わったので、メニューを手にとってどんなものがあるか見てみる。

（…お、カツカレーあるじゃん）

何ページかめくっていると、カツカレーの絵が目に入った。

（カツカレーていいや）

メニューが決まったので元の場所に戻す。

「ん…何にしようかな…」

隣でリンがうなる。

周りを見渡すと、俺以外の奴らはまだ決まっていなかった。

（まだ皆決まっていなかったのか…まあいいや。曲でも聞きながら待とう…）

そう思つて、ポケットから音楽プレイヤーを取り出し、曲を聞こうとした時

「ねえ、駿君。もう決まったの？」

とミクが声をかけてきた。

「ああ。決まったよ」

そう答えると

「相変わらず早いね…」

とミクがそう呟き、再びメニューを見始めた。

（むしろ何故メニュー選ぶのにそんな時間かんだ？）

そう思いながら、イヤホンを耳につけ曲を流す。

（やっぱり神曲はいいね！）

と曲を聞きながらぼんやりと考えた。

「お待たせしました〜カツカレーになります〜す」

店員がカツカレーを持って来たので、小さく挙手をして自分の注文であることを示す。

「やっときたよ…さて、いただきますっ」と

そう呟いて、俺はカツカレーを食べはじめた。

混んではいえ、来るのが遅くて少々待ち遠しいのにも関わらず、よりにもよって他の皆のメニューが来て5分以上経っても自分の分は来ないときはさすがにイラッとした。

（まあ、うまいからいいか）

食べながらそう思ってカツカレーを頬張る。

「ん〜！おいしい！！」

テーブルを挟んで対角線上に座っているリンが幸せそうな表情でそう言う。

「ほんと、ここのカレーおいしいね」

リンの隣、つまり俺の正面に座っているミクも同意する。

「ま、この店は当たりだな」

そついいながら、コップの水を飲む。

「あゝ！駿お兄ちゃん水飲んだゝ！」

突然、リンが叫ぶ。

「ああ？別に水くらい飲んだっていいだろ？」

そう答えた俺に

「ダメだよ！カレーを食べる時は食べ終わるまで水を飲んじゃいけないってルールでしょ！」

と叱るようにリンが言う。

「そんなルール、いつ決めた？」

そう聞くと

「さっき皆で決めたじゃん！カレーが来るの、待ってる間にさ」

と言われたので

「なあレン。そんなの決めてたっけ？」

と隣に座っているレンに聞くと

「決めたよ？まあ、駿兄ちゃんはイヤホンして曲聞いってて上の空だったから覚えてないだろうけど」



と嫌味たっぷりな感じで言われた。

（…まだジェットコースターのこと、引きずってたのかよ…）

レンの態度は明らかに仕返しをするような態度だったので、理由はすぐに分かった。

（ちょっと調子乗りすぎちゃったかな…）

自分のした行動を少し反省しながらも

「まあ、やっちゃったことはしょうがないだろ」

と言って再び水を一口飲み、カレーの残りを口にすると

「…ん？」

少しさつきと味が違うことに気づいた。そしてその瞬間、凄まじい辛さが口の中に広がった。

「~~~~っ！！！！辛iiiiiiii！！！！」

そう叫ぶが、あまりの辛さに身動きが取れなかった。

「や～いや～い！！引っ掛かった引っ掛かった！！」

視界の端で双子が喜んでいるのが見え、殺意が沸いたが

（と、とりあえず水を飲もう…）

殺意より水分を摂ることが今の俺の最優先事項なので、コップを探した。しかし

（あ、あれ…コップ…ないぞ…）

さっきまで手元に置いてあったはずの自分のコップがなくなっていた。

「お、おい…誰か俺のコップ…」

そう言いかけた時

「カレー食べ終わるまで飲み物はなしだよ？お兄ちゃん！」

と、笑顔でリンが言った。

「そつだよ駿兄ちゃん。ルールはちゃんと守らなきゃ」

隣にいるレンも一緒に言う。

「ち、畜生…おいミク、このガキどもになんか言ってるやっでくれ！」

そつミクに助けを求めるものの

「え…ま、まあルールはルールだからさ？私もずっと我慢してるし…」

とミクまで参加していて助けてくれないので

「ち…くしょう…」

そう毒づき、残ったカレーを頑張つて食べることにした。  
だが

「ぐわっ！さつきよりさらに辛いじゃねえか！！これ！！」  
またも地獄を見た。

・  
・  
・  
・  
・

カレーを皆で食べるのはよかったけど、途中でリンちゃんが

「カレー食べ終わるまでに水を飲んだら罰としてタバスコ入れるってことで！！」

って言い出して、冗談抜きで本当にやるみたいだったから私も頑張つて水を飲むのを我慢したら、目の前で駿君が普通に水を飲んじやった。

（あ…飲んじやった…タバスコだなあ…）

そう思っていると

「あゝ！駿お兄ちゃん水飲んだゝ！」

とリンちゃんが大声で叫んだ。

「ああ？別に水くらい飲んだっていいだろ？」

そう返す駿君に

「ダメだよ！カレーを食べる時は食べ終わるまで水を飲んじやいけないってルールでしょ！」

とリンちゃんが言い返す。

（お姉ちゃんタバスコ入れて！）

言い返しながらリンちゃんが目でサインを送ってくる。

（い、いや…やっぱり止めた方が…）

（ダメ！早くして！）

リンちゃんの目があまりにも真剣というか怖かったというか…とにかく凄い睨みつけられちゃったから

（ごめん駿君！！）

そう思いながらタバスコを入れた。

「まあ、やっちゃったことはしょうがないだろ？」

そういつて、また水を飲んでしまいタバスコを入れたカレーを口にした。

でもやっぱりすぐに気づいたのか、駿君の表情が変わり

「~~~~っ！！！！辛iiiiい！！」

と口に手を当てて叫んだ。

（ほんとにごめんなさい！）

心の中でそう謝るけど

（お姉ちゃん！お兄ちゃんのコップこっちに持ってきて！）

と、またリンちゃんにアイサインを送られちゃったから

（…駿君頑張って！）

と心の中で言ってコップをこっちに寄せる。

「お、おい…誰か俺のコップ…」

駿君が手元にコップがないことに気づき、自分のコップを探してたけどそのコップは私の膝の上置いてあるので見つけれないのは当たり前だった。

結局、水を飲まずに残りのカレーを食べることにした駿君だったけど、コップを探してるうちにレン君が追加でコシヨウもかけたので食べ終わる頃には目が死んでいた。

「まだかな」

退屈そうにリンちゃんと言った。

ちなみに今は遊園地の醍醐味とも言えると思うパレードを見るために席を陣取って待っているところだった。

「まだまだだろ。ここをパレードが通るのは最後の方なんだから」

レン君がそういうと

「えゝ…なんで最初の方にしなかったの？」

と聞き返した。

「だって…」

そういつてレン君が目を向けた先には、魂が抜けたような目をしてキャラメルアイスを食べる駿君がいた。

「だらしないなあ…あのくらいでダウンするなんて…」

そうリンちゃんが言ったから

「い、いや…あれくらいされたら誰だってダウンすると思うよ？」

とフォローをしたけど

「お姉ちゃん…いくらお兄ちゃんが…」

「わーっ！…ごめん！…分かったから言わないで！…」

言いかけるリンちゃんを慌てて遮ると、リンちゃんは意地の悪い顔をしてニヤリと笑った。

（うう…これを出されたら勝てないよ…）

勝ち誇った笑顔を見せるリンちゃんを尻目に溜め息をついてパレードが来る方向を向く。

「…まだこねえなパレード」

いつの間にか横にいた駿君が声をかけてきた。

「うん…そうだね」

そう返すと

「…体の方は大丈夫なのか？」

思ってもみない言葉が駿君の口から飛び出した。  
きつと昨日のことがあったから心配してくれたんだと思う。

「えっ…うん…大丈夫だよ。心配してくれてありがとう」

何気ない駿君の気遣いが嬉しくて、笑顔でそう返事すると

「別に。ぶっ倒れられたら運ぶの俺だし。そんなの面倒くさいから聞いただけだ」

と言ってそっぽを向いてしまった。  
暗くてよく見えなかったけど、ちょっとだけ駿君の顔が赤くなって

たように見えた。

「あ、パレード来たよー!!」

後ろでリンちゃんと言って指を指した方を見ると、まさにパレードが私達の方に来ようとしているところだった。

それからあつという間で、遊園地のキャラクター達が次々と登場して、踊ったりお客さんに手を振ったりしていて

「わぁー! キヤティこっち向いてくれたー!!」

とリンちゃんはおおはしゃぎだったり

「たまには遊園地も悪くないな」

と隣で駿君がしみじみと呟いたり

「あの着ぐるみの中の人、大変なんだろうな…」

とレン君が夢のないことを言っていたり

「うわぁ…踊ってるエキストラの人達、皆綺麗だなあ」

と私は私で呟いたりしてパレードを楽しんだ。

「あー楽しかったねえ!!」



そう幸せそうな表情をしたリンちゃん言う。

「ほんと、楽しかった！また、皆でこようね！」

私もリンちゃんに同意する。

「まあ、しょっちゅうは嫌だけどたまに来るのはいいかもな」

駿君も同意してくれた。

「あれ？レン、どうしたの？」

リンちゃんがレン君の方を向いて尋ねる。

「・・・お腹痛い・・・」

レン君の方を見ると、お腹を押さえて苦しそうにしていた。

「もっっ！！何でそういう空気の読めないことになるの！？」

レン君に向かって噛み付くようにリンちゃん言う。

「う、うるさい！俺だって好きでお腹痛くなってる訳じゃないんだ  
！！」

そう反論するレン君だったけど、よっぽどお腹が痛いのかすぐに静かになってしまった。

「まあ近くにトイレもあることだし、帰る前にトイレ寄ってこようぜ？」

と駿君が提案したので、トイレに行くことにした。

「全く…レンったらこういう時に限ってお腹痛くなったりするんだから…」

トイレに入って順番待ちをしていると、リンちゃんが呆れたように言った。

「でも、そういうリンちゃんだってさっきからトイレ行きたかったんでしょ？」

パレードの最後の方から、ずっともじもじしていたのを思い出したから、そう言うところ

「ち、違うもん！！別にトイレに行きたくてもじもじしてた訳じゃないもん！！」

と顔を赤くして言い返して来た。

「あれえ？当たってたかな？」

さっきの仕返しのもりで、ちょっと意地悪に言っただけだと

「~~~~っ！！」

リンちゃんは悔しそうな表情をした。

そんなことをしている内に個室が二つ同時に空いたので、私達は用

を足すために個室に入った。

用を済ませ個室から出る前に身だしなみを整えていると

「お姉ちゃん、先に外に出てるね！」

というリンちゃんの声が聞こえたので

「うん！私もすぐに行くね！」

そういつて身だしなみを整えた。

外に出ると、男子二人はもう待ってたけど、そこにリンちゃんの姿はなかった。

「あれ？リンちゃんは？」

そう駿君に聞くと

「見てねえよ？ミクこそ、リンと一緒にじゃないのか？」

と言われたから

「ううん。リンちゃん、先に外に出てるって言って出てっちゃったから……」

そう答えると

「あゝあ…またリンの奴、迷子になったのか…」

とレン君が面倒くさいと言わんばかりの表情をした。

「レン、リンは携帯持っていないのか？」

駿君がレン君に質問する。

「僕らは携帯を共有してるんだ。今は俺が携帯を持ってるからリンには連絡つかないよ」

とレン君は冷静な態度で言っていたけど、その顔には明らかに心配そうにしている表情が浮かんでいた。

「ならやることは一つだな。虱潰しに探すしかないだろ」

そう駿君が言う。

「そんな！無理だよ！広すぎるもん！それにリンがここに戻って来るのを…」

そう言いかけたレン君を

「あほかお前。リンが一度来た場所に帰ってくるような奴だと思っ  
か？仮にも双子ならそれくらい分かるだろ？それに今ならまだそう  
遠くには行っていないだろ」

と言って駿君が諭す。

「じゃあ私、もう一度トイレ見てくる！」

そういつて私は踵を返そうとした時

「待てミク！30分後にゲート前に集合だ。見つかったら連絡してくれ」

そういつて、皆それぞれ広がって行つた。

「リンちゃん！いる？」

トイレの中に向かって呼びかけるけど、やっぱり返事はなかった。

（どこ行っちゃったんだろう…）

・ ・ ・ ・ ・

トイレから出て来たのはよかったんだけど、暗くて周りが良く見えなくて適当に辺りをうろついてたら自分がどこにいるのか分からなくなつてた。

「ミクお姉ちゃん！-」

お姉ちゃんの名前を叫んでみたけど、返事なんて返って来なくて、すごく不安になって来た。

（皆、私のこと置いてきぼりにして帰っちゃったらどうしよう…）

そう思うと、なんだか涙が溢れてきた。

（泣いちゃダメだ。泣いちゃ…）

泣くのを必死で堪えようと下を向いて歩いていると

《どん！！》

「きゃっ！！」

「わっ！！」

誰かにぶつかってしまった。

「ご、ごめんなさい！」

ぶつかった人に向かって慌てて謝る。

「だ、大丈夫？」

そう声をかけられふと見上げると、そこにはあの青い髪をした男の人が立っていた。

「また会ったね。どうしたの？」

心配そうな顔をして男の人が私の顔を覗き込んで

「ハンカチ、使うかい？」

とハンカチを差し出してくれた。

そこで初めて、私は自分が泣いてることに気づいた。

「あ、ありがとう…」

かろうじてそれだけ言って、ハンカチを受け取る。

「で、そんなに泣いてどうしたの？」

男の人が私に問い掛ける。

「えっ…と、皆でトイレに行って、出てきたら暗くて迷っちゃって…ひつく…それで…えぐ…皆を探してたんだけど…ぐずっ…」

泣かないように我慢してたけど、事情を話してる内に堪えきれなくなっ

「う…うわああん！！お姉ちゃん達とはぐれちゃって…うっ…」

もう大声で泣いてちゃってた。止めようにも泣くのを止められず、泣き続ける。

「そっか…おゝいルカ！メーちゃん！」

男の人は連れの二人を呼んで

「俺達も一緒に探すよ。だからそんなに泣くな」

と言ってくれた。

「うん…！ありがとう…」

それからいろいろ歩き回ってみたけどお姉ちゃん達は見つからなくて、もう歩くのも辛くなってきた。

「やっぱり皆、私のこと置いて帰っちゃったのかな…」

そう呟くと

「そんなことないわよ。皆きつとリンちゃんのこと探してるわ」

とピンク色の髪をした女の人、ルカさんが言ってくれた。

「そうだな…出るにも入るにもゲートは一つしかないから、ゲート前で待つのが一番確実じゃないか？」

とカイトさんが提案すると

「そーねえ…それがいいんじゃないかしら？」

と茶髪の美人、メイコさんが同意した。

「じゃあ決まりだな」

そういうことで、ゲートに向かうことにした。

・  
・  
・  
・  
・

30分園内を走り回ったものの、収穫はないに等しく、とりあえ



ず俺は集合場所のゲート前に向かった。

既にミクとレンは合流していたが、リンの姿が見えないので二人とも見つけられなかったのだろう。

「あ、駿君！…やっぱり見つからなかった？」

「ああ」

俺の答えにミクはしょんぼりとした。

「ごめん…私がもっとしっかりしてたら…」

ミクが唇を噛んでさういう。

「きにすんな。これくらい稀によくあるだろ？」

そう慰めていると

「お姉ちゃん！！」

聞き慣れた元気な声が聞こえてきた。

「リンちゃん！！」

声を聞いたミクが弾かれたようにリンに向かって走り出す。

「「よかったあ！！」」

ミクとリンは抱き合ってそのまましばらく動かなかった。

ふと見ると少し離れた所にリンがぶつかった人とその連れが立つ

ていた。

「連れが世話になりました。ありがとうございます」

とりあえず建前上礼をする。

「いやいや、大丈夫だよ」

そう言われたので、頭を上げる。

「あ、紹介するね！」

いつの間にか俺の横に来ていたリンが彼らを紹介してくれた。

一通り、お互いの自己紹介が終わったので俺達は帰ることにした。

ちなみにカイトさん達一行も有賀島町に住んでいるらしく帰りは一緒に帰ることにした。

リンとのいきさつを聞き、お礼と謝罪をする。  
最もカイトさん達は大丈夫だと笑ってくれたが。

「機会があつたら、今度は俺達も一緒に遊んでいいかな？」  
と聞かれたので

「まあ、断られることはないと思いますよ？」  
とだけ返しておいた。

（…そういえばミクに出会ってから一気に知り合いが増えたな…）

ここ最近を振り返り、そうぼんやりと思った。

（不思議な奴だな…こいつの周りにはいつも誰かが集まるんだから…）

少しだけ、そんなミクがうらやましくなって、車窓から景色を眺めた。

いつもより、街の光が綺麗に見えた。

## 第9話 皆とお出かけ 後編（後書き）

いつもより長めになりました。

最後の方は駆け足でしたが…

カイト、メイコ、ルカが登場したので、これからもっと賑やかになるようにがんばります。

登場人物紹介？（前書き）

新メンバーの紹介です

## 登場人物紹介？

ル力達の紹介です。

巡音 ル力

（めぐりね るか）

年齢 20才

性別 女

好きなもの

・ タコ焼き

・ 植物

・ 読書

・ 子供

嫌い（苦手）なもの

・ ルールを破る人

・ 非常識な人

・ 汚いもの

性格、その他

性格はおっとりとしたもので、基本的に誰と話しても優しい雰囲気  
気を漂わせている。

子供と接することが好きなため、有賀島町にある大学の教育学部  
に通っており、それなりに忙しい毎日を送っている。

タコ焼きが大好きで、見かけると我を忘れて買いに行くところが

あり、周囲を呆れさせることもしばしば。

プチ潔癖症で、ゴミなど汚れたものを触ることに激しい抵抗を示す。

またルールや約束を守るのはきつい方で、守らない人を嫌う傾向がある。

ミクやリンとは姉妹のような関係であると共に、相談役にもなっている。

巡音 メイコ

（めぐりね めいこ）

年齢 22才

性別 女

好きなもの

- ・酒全般
- ・騒ぐこと
- ・犬、猫

嫌い（苦手）なもの

- ・静かなところ
- ・暗い雰囲気
- ・貧乏くさいこと

性格、その他

直接血の繋がりはないが、ルカの姉。

もともと巡音家の人間ではないが、メイコが生まれる前に父を、メイコが生まれた直後に母を病で失ったため、生前交流の深かった巡音家に引き取られることになった。

かなりの酒好きで、家にいる時の大半は酒を飲むことが多く、よ

くルカに叱られている。

最も、家にいる時だけでなく外食した時も飲みまくるので、酔い潰れてルカに介抱されるのはいつものこと。ちなみにルカもメイコもナイスバディなので、女性にはよく憧れの目で見られる。

始音 カイト

（しおん かいと）

年齢 22才

性別 男

好きなもの

- ・アイス
- ・音楽観賞
- ・ドライブ

嫌い（苦手）なもの

- ・溶けたアイス
- ・辛いもの
- ・理論的に考える必要があること

性格、その他

性格はいたって真面目。

基本的にやらなければならないことはしっかりとこなし、余裕があれば他人を手助けすることもあるので、周囲からの評価も高い。

巡音姉妹とは幼なじみで、小さな頃からよく一緒に遊んだりして



いる。

特にメイコとは気が合うので、よく飲みに行ったりする仲であるが、それ以上にお互いを男女として見始めており、たまにぎこちないやり取りをすることもある。

三度の飯よりアイスが好きで、基本的にアイスを片手に持って行動することが多いが、溶けたアイスは

「溶けたアイスはアイスじゃない！」

と言っており嫌っている。

ちなみに何故か暑かろうが寒かろうがマフラーをしている。

第10話 とある休日にて 前編（前書き）

少し更新遅れました…

## 第10話 とある休日にて 前編

「うわゝゝっ!!遅刻する!!」

誰かがそれを聞いて突っ込んでくれるわけじゃないけど、そう大声を出しながら家を飛び出す私。

「あつ、家の鍵閉めないと!!」

家を出て三歩くらいところで家の鍵を閉めていないことに気づき、回れ右をして鍵を閉める。

「どうしよう!時間まで後20分だよ!間に合うかなあ・・・」

一人でそんなことを言いながら集合場所に向かって走る。

遊園地に行ってから2週間後・・・今日はリンちゃんとルカお姉ちゃんと私の三人で女子会をやることになっていて、駅前のカフェに1時に集合することになってたんだけど、昨日、漫画を読むのに夢中で夜遅くまで起きていたせいなのか、今日起きたのが11時45分だった。

急いで用意して家を飛び出したけど、その時にはもう12時40分になっていて集合まで後20分しかなかった。

(走ればぎりぎり間に合うかなあ...)

そんなことを考えながらカフェに向かって走る。

いくつもの信号を走り抜け、時には赤信号で待ちながら目的地に

向かって走り続ける。

「はあっ、はあっ……」

私はもともと運動が得意じゃないから、ちょっと走っただけでも肩で息をしてしちゃうし、靴がお出かけ用のもので走りやすい靴じゃないのも響いてるけど、そんなことを言い訳にして遅刻することはできないから必死に走り続ける。

しばらく走り続けていると、ようやく集合場所のカフェが見えてきた。

息を切らしながら腕時計を見る。

（ま、間に合った…）

時計の針は12時55分を指していて、なんとか時間に合うことが出来た。

「あ！ミクお姉ちゃんこっちこっち〜！」

私が来たことに気づいたリンちゃんが大きな声で私を呼ぶ。その隣には優しい笑顔を浮かべたルカお姉ちゃんがいた。

（わかりやすいんだけど、ちょっと恥ずかしいなあ…）

大声を出せば当然周りの人の視線を集めることになるから、それにちょっとだけ恥ずかしさを感じながらリンちゃんの所に向かう。

「ごめんね。待った？」

「うつん。私達も今来たところだよ！」

笑顔でそう答えてくれるリンちゃんを見て、ほっと胸を撫で下ろした。

その時

《ぐうぐう》

と、私のお腹がなってしまった。

「~~~~っ!!」

声にならない叫びをあげる私を

「あはははっ！お姉ちゃん、お腹なった〜！」

と言ってリンちゃんが笑った。

「い、いや、これは…そ、その…」

必死にお腹がなった理由を言い訳しようとするけど、恥ずかしさで頭が真っ白になっちゃって何も思いつかなかった。

そんな私を見かねたのか

「ふふっ！ミクちゃん、今日寝坊してお昼まだ食べてないんでしょ？じゃあカフェじゃなくてファミレスにしましょうか」

と言った。

そしてそれに便乗するかのようにリンちゃんが

「じゃあ私、パフェ食べる〜！」

と言ったから、私達はカフェの近くにあるファミレスに行くことにした。

・ ・ ・ ・ ・

今日は昼前になってから突然隣の部屋が騒がしくなって、隣のドアが開く音がしたと思ったら

「あつ、家の鍵閉めないと!!」

というミクの声が聞こえ、そのままバタバタとどこかへ走っていったようだった。

(そついや今日女子会やるとか言ってたな・・・)

昨日の学校の帰りにミクが言っていた事を思い出し、先程起きたことに納得したが

(まあ、俺には関係ないしどうでもいいや)

そう思って、ゲームを起動した。

それから1時間余りした頃

《ピンポン》

と家のチャイムがなった。

「はい。今行きまーす」

そういつてドアを開けると、そこにはレンがいた。

「よお、レン。どうした？」

そう聞くと

「駿兄ちゃん！僕とゲームで勝負だ！！」

と、びしっという効果音がつきそうな勢いで俺に向かって指を指してそう言った。

「…いいぜ、かかってきな」

笑みを浮かべながら俺はそういつてレンを中に入れた。

「で、レン。なにで勝負するんだ？」

「ん…じゃあ最初は格ゲーから！！」

「へーい」

俺はさっきまでやっていたゲームをセーブして電源を切り、レンのリクエスト通り格闘ゲームのカセットに入れ替える。

ちなみに今から使うゲーム機は据え置き型のゲーム機の中ではほぼ一番新しいもので、ネット環境が整っていれば世界中の人たちと

一緒にゲームを遊ぶことができるものだ。もちろんオフラインでの複数人数プレイもカセットによっては今までどおり可能だ。

だが、少々値が張るためそう簡単に手出しできる代物ではない。俺は入学祝で買ってもらえたのだが、どうやらレンはお年玉とずっと貯めてきた貯金を使ってようやく買うことができたらしい。

「そついえば今日はお前一人で来たな。リンはどうした？いつも一緒に行動してるもんだと思っただが？」

そう聞くと

「リンは今日ミク姉ちゃんとルカ姉ちゃんと女子会だよ」

と返してきた。

「ああ・・・女子会ってそのメンバーか。女子会っていうより姉妹でお出かけて言う言い方の方があってるんじゃないのか？そのメンバー構成だと」

女子会のメンバーを聞いてそう思った俺がカセット入れながらレンに向かって言うと

「確かに。そういう言い方のほうが絶対しっくり来るよね」

とレンも同意した。

「よし、準備できたぜ。ハンデつけるか？レン」

一応確認のため聞いておく。するとレンは



「ハンデ？兄ちゃん僕をなめないほうがいいと思うよ？」

と自信たっぷりの返事をしてきた。

「ほう・・・そりゃあ楽しみだ。じゃあお言葉に甘えて本気で行くぜ？」

「やれるもんならやってみる！」

そしてメニュー画面から対戦を選び、それぞれ使うキャラを選択し次にステージ選択画面になったが、すかさず俺がランダムを選んだ。

「あつ！！ちよつと！ステージくらい選ばせてよ！！」

レンがこっちをにらみながらそういつてきたが

「ステージなんてどこも一緒だ。気にするなよ」

そういつて受け流した。

（ま、ステージごとに若干戦術変わってくるけど）

そう思いながらロード画面を眺めた。

《レディー・・・ファイト！！》

対戦開始のアナウンスが流れる。それと同時に二人の雰囲気が変わる。

対戦が始まると、まずレンは出の早い技を繰り出して来た。

それを横にかわし、こちらにも出の早い技で反撃する。

そのままコンボを繋ごうとした時、すかさずレンが防御体勢に入り、こちらの攻撃を全てガードした。

（レンの奴、なかなかやるじゃねえか。こんなに戦えるやつは今までいなかったぜ・・・だがっ!!）

レンがどの程度の実力を持っているか少し防御に徹して様子を見ていたが、今まで対戦してきた誰よりもうまくなかなかの実力を持っているので、少し本気を出すことにした。

俺の攻撃を全てガードしたレンは即座に反撃の体勢に入り攻撃しようとするが、それよりも早くレンの後ろに周り込む。

「しまった!」

そう叫んだレンに構わず怒涛のラッシュを食らわせる。

そして

《K・O!!》

と画面に表示され、レンのキャラが倒れる。

「クソッ!! 負けたあッ!!」

レンが頭を抱えて言った後

「いい線行ったと思ったんだけどなあ・・・」

と呟いた。

「まあ、中学生にしちゃあなかなかの腕前だったな。でもまだまだ  
実力不足だな」

そういうと

「駿兄ちゃんが強すぎるんだよ。それでも僕、近所で一番強いんだ  
よ?」

とレンが言った。

「上には上がいるんだよ。世の中もつと強い連中がいるぜ?」

「マジで!? 駿兄ちゃんでも勝てないような奴らが!?!」

驚くレンに

「ああ。前オンラインでやったけど何もできずに負けたよ。あれは  
もう清々しいくらいの完敗だったな」

そう自分の経験を話した。

「世の中にはそんな人がいるんだ・・・ちょっとやってみたいな」

そう呟くレンに

「やめとけ。いつもそういう実力のある連中とやっても負けるだけ  
であんまり楽しくないと思うぞ?」

と忠告しておいた。

「どうして？」

不思議そうな顔をしてこちらを見返すレン。

「うまい奴らはほんとにうまいからな。流石に一度や二度くらいならいいが何度も負けると嫌になってくるぜ？」

「へえ……そうなんだ……」

少しがっかりした様子のレンに

「ま、今はそんなことより俺との対戦に集中したほうがいいんじゃないか？」

そういうと

「そうだね！！よし！もう一回だ！！」

そうレンが言って、二回戦目をはじめた。

・  
・  
・  
・  
・

「あゝおいしかったあ！」

お昼ごはんを食べたミクちゃんが幸せそうな笑顔でそういった。

「お姉ちゃんまたネギたま丼だったね」

ミクちゃんの隣でリンちゃんがそういった。

「えゝだつてネギ大好きなんだもん！」

リンちゃんに向かってミクちゃんがそういった後

「ルカお姉ちゃんは好きな食べ物なあに？」

と私に聞いてきた。

「そうねえ・・・私はたこ焼きが好きだわ」

「へえゝ！たこ焼き好きなんだゝ」

リンちゃんが興味津々な顔をしてそう言ってから

「私みかんとかオレンジとかが好きゝ！！」

と自己アピールをしてきた。

（まだこのくらいの年の子供達は可愛げがあつていいわね）

目の前で二人並んで楽しそうに笑い会話をするミクちゃんとリンちゃんを見ながらそう思った。

「ところでルカお姉ちゃんは大学でどんなことを勉強してるの？」

不意にリンちゃんが聞いてきた。

「私は教育学部にいるの。だから簡単に言えば学校の先生になるた

めの勉強かな」

そう答えると

「へー！！ルカお姉ちゃん学校の先生になりたいんだー！すごい！」

と感激したような様子でこちらを見た。

「でも、なかなか大変なのよね・・・人に物を教えるってことは、当然その人たちの知らないことを知っていきなくちゃいけないから勉強も今までより大変になるのよ・・・おかげでなかなか休みがなくなってる」

「へー・・・高校の勉強も正直結構大変なのに、大学になったらもっと大変になるんだね・・・」

すこしげんなりとした表情でミクちゃんが言う。

「あ、でもね大学は楽しいわよ！高校よりもっといろんなところから人が集まってくるから、面白い人もたくさんいるし、サークルとかもたくさんあって退屈しないわ」

そういつてあげると

「ほんと！？大学かあ・・・行ってみたいなあ・・・」

とミクちゃんが呟いたので

「それなら夏休みとかに来てみるといいわ。高校と同じでオープン

キャンパスとかもやってるから、一度来て見たらどうかしら？それに都合がつけば研究室や教室には入れてあげられないけど、大学を案内することもできるかもしれないしね」

と喋ってあげた。すると

「ほんと！？じゃあいつかお願いしていい？」

と目を輝かせながらミクちゃんが言った。

「ええ！いいわよ。その時は携帯で連絡取り合いましょうね」

「リンも行きたい〜！」

「もちろん、リンちゃんも一緒においで」

そんなこんなで、私の大学を案内する約束をした。

「あ、私ジュース持って来るけど皆何か持ってきてほしいものある？」

そう喋ってミクちゃんが席を立つ。

「私、オレンジジュースがいい！！」

「それじゃあ私はウーロン茶を頼もうかしら」

「オッケー！じゃあ持って来るね！」

そう喋ってミクちゃんはドリンクバーのほうに歩いていった。す

るとリンちゃんが

「ねえねえ、ルカお姉ちゃんは彼氏とかいないの？」

と突然聞いてきた。

「どうしたの？突然そんなこと聞いてきて」

質問を質問で返すと

「うっん、別に深い意味はないんだ。でもやっぱり女の子ってそういう会話するでしょ？」

「そうね・・・私はあまりそういう話をしたことはないけれど、そうかもしれないわね」

「でしょ！だから教えてよ」

そういつて聞いてくるリンちゃんに

「残念だけど、そういう人は私にはいないわ」

と微笑みながら答える。すると

「じゃあじゃあ、好きな人は？」

とさらに質問してきた。

「そうね・・・そういう人もいないかな。リンちゃんは？彼氏さんとかはいるの？」



答え、そう聞き返すと

「私にはレンがいるから大丈夫!!」

と、笑顔でそう答えた。

「あらあら、そうなの〜じゃあレン君を大事にしてあげてね？」

「うん!!」

そこに

「ジュース持って来たよー」

ジュースを持ってミクちゃんが帰ってきた。

「あ!恋愛真っ最中のミクお姉ちゃんだ!!」

そう茶化すようにリンちゃんが言うと

「リ、リンちゃん!こういうところでその話はやめてよ!!」

そういつてミクちゃんは顔を真っ赤にしていった。

「あらあら、ミクちゃん、彼氏さんでもいるのかしら？」

「い、いや・・・彼氏はいないけど・・・じゃなくて!彼氏もいないし好きな人もいないもん!!」

顔を真っ赤にしてミクちゃんが大声でそう言ったところを

「お姉ちゃん、声大きいよ？周りの人見てるよ？それに思いつきり好きな人いるって言っちゃってるよ？」

とリンちゃんが止めを刺すように言った。

「~~~~~っ！！！！」

真っ赤だった顔をさらに赤くして今日二度目の声にならない叫びをあげたミクちゃんだった。

## 第10話 とある休日にて 前編（後書き）

思ったより長くなりそうなので前編・後編にしたいと思います。

この先も不定期更新になるかもなので、その辺はよろしく願います。

第11話 とある休日にて 後編（前書き）

11話です。

## 第11話 とある休日にて 後編

「あはははっ！お姉ちゃんまだ顔真っ赤だ〜！」

あたりにリンちゃんのよく通る声が響き渡る。

「リ、リンちゃん・・・お願いだからもつと声小さくしてよう・・・」

そう懇願すると

「あつ、ごめんごめん」

そういつてリンちゃんは舌をペロツと出した。

「それにしてもミクちゃんは見かけによらず恋ばなが苦手なのね。すぐ顔真っ赤になるもの。私も何度かそういう話はしたことはあるけど、そんなに顔を真っ赤にする人は初めて見たわ」

隣にいるルカお姉ちゃんもくすくす笑いながらそういう。

「皆の意地悪う・・・私こういう話したことないのに・・・」

恥ずかしさで熱く火照った顔を下に向けながら私はそう呟いた。

ファミレスでみんなのジュースを取りにいった席を離れているうちに恋ばなをしていたリンちゃんに戻って早々

「あ！恋愛真っ最中のミクお姉ちゃんだ！！」

と大声で言われてしまい、恥ずかしさで完全に思考が停止しちゃってそこから今に至るまでの記憶はほとんど思い出せない。分かっているのは今私達はいつもの丘の上公園にいることだった。

この公園に来るまでのことを思い出そうとしても、頭に浮かぶのは駿君のことばかりでその度に顔が火照り頭が真っ白になる。さっきからずっとこの繰り返しだった。

「それにしても、ほんとにいい場所ね。この公園」

顔を真っ赤にしている私の横でルカお姉ちゃんがしみじみと言う。

「でしょ？私達とミクお姉ちゃん達が出会った場所でもあるんだよ！！」

そう自慢げにルカお姉ちゃんに言うリンちゃん。

「あら、そうだったの。そっか、ここはあなた達の思い出の場所でもあるのね」

そう私達のほうを向いて微笑みながらルカお姉ちゃんが言った。

「そうだよ！！それにここ景色綺麗だからさ、お姉ちゃん達も、今度デートコースに使いなよ！」

そうリンちゃんに言われて、思わず駿君と二人で並んでここを歩くことを想像してしまい、また顔が火照ってきちゃっけど

（な、並んで歩くことなんて、今まで何回もあったじゃん！全然恥

ずかしくないよ！何考えてるんだろ・・・私）

そう考えて頭を左右に振った。

「・・・ちゃん？ミクお姉ちゃん？」

呼ばれていることに気づき、慌てて返事をする。

「あっ・・・え、な、何？リンちゃん」

「何じゃないよーさつきから呼んでるのにちつとも返事してくれないんだもん。さてはまた・・・」

いいかけるリンちゃんを遮って

「わーっ！！お願い言わないで！！」

と思わず叫んでしまっていた。

「あらあら、そんなに隠そうとしなくていいじゃない。別に近くに人がいるわけじゃないんだし、私はミクちゃんの好きな人を聞いたからって人に言いふらしたりはしないわよ？」

叫んだ私の隣で、ルカお姉ちゃんが微笑みながらそういう。

「大丈夫だよお姉ちゃん。私だって誰にも言っていないからさ」

慰めてくれていいのか、リンちゃんもそう言ってくれた。でも全然慰めになってない。

「ねえミクちゃん。よかつたらミクちゃんの好きな人教えてくれない？何かアドバイスしてあげられるかもしれないわよ？」

やさしくルカお姉ちゃんがそういった。

「そうだよ！！経験豊富なルカお姉ちゃんにアドバイスしてもらえばいいじゃん！」

リンちゃんもルカお姉ちゃんに便乗してそういった。

「うう・・・わ、私は・・・」

そこまで言いかけたけど

「・・・やっぱり恥ずかしくて言えないよ！！」

そっいつて顔を伏せた。

「あらあら、じゃあ私の予想をちよつと言ってみましようか」

そうルカお姉ちゃんが言い、そして

「ずばり、ミクちゃんは駿君のことが好きなんでしょ？」

とぴったり当ててきた。

「え・・・あ・・・うん・・・あたり・・・」

一発で当てられたことに対して驚きを抱くどころか、むしろ恥ずかしさが勝って今日何度目になるか分からないけど、まるで顔から



火が出るんじゃないかっていうくらいの熱さまで顔が火照った。

・  
・  
・  
・  
・

「くそー！！全っ然勝てねえ！！」

今日何度目かの素晴らしく悔しそうな表情をして、レンが言う。

「全く・・・何度言ったら分かるんだ。お前行動パターンが読みやすいんだよ」

そっいつて俺はコップに入れたジュースを飲み干す。

「えゝ・・・さっきから結構使う技変えたりしてるんだけどなあ」

腕を組んでレンが唸るように言った。

「使う技を変えれば良いってもんじゃないだろ。避けて攻撃、一撃入ったら大技に移る。お前さっきからこれしかやってこねえんだからなあ・・・」

呆れたようにそっいつた時、俺の携帯がなった。

「・・・ミクから電話？・・・もしもし？」

電話に出ると、ややテンパった声のミクが

《あっ・・・もしもし？駿君？ミクだけど》

と言った。

「なんだ？電話するなんて珍しいな。何か急ぎの用でもあるのか？」

《うっん。そうじゃないけど…実は今から皆で駿君の家に行こうって話になっちゃって…》

「…どういつ話をしたらそんな展開になるんだ…」

《う、ごめん…でも他にもう行くところないしさ…お願いできる？》

（そついやリンも一緒に言ってたな。丁度いいや、レンをお持ち帰りしてもらおう。見送りめんどいし）

「ああ、いいよ。ただし菓子やジュースはないから来るなら買ってこい」

そついうと

《ほんと！？ありがとう！じゃあ後20分くらいで行くね！》

と喜んだような声を出して一方的に電話を切られてしまった。

「…はあ…やっぱり理解できん」

思わずそつ呟き

「おいレン、部屋掃除すつぞ。女子会の皆さんが来るらしいから」

とレンに言ってそこら辺に散らかった菓子のゴミを拾い始めた。

それから約15分後：

《ピンポン》

「あ、来たみたいだよ」

家のチャイムがなったので、玄関に向かう。

「へーい」

いいながら、ドアを開けると

「おじゃましまあす！ー！」

と言うより早くリンが部屋に入ってこようとした。

「おいリン、お邪魔しますをいえば勝手に入っていいわけじゃねえぞー！」

そう言っリンの頭を押さえつける。

「むうー・・・いいじゃんそれくらい」

頬を膨らませてリンが言ってきたが、スルーした。

「・・・で、ミク」

「はっ、はいっ！何？」

いきなり呼ばれて驚いたのか、若干上に飛び跳ねたミクにさっきから疑問に思っていたことを聞く。

「お前らは俺ん家に何しに来た？」

「え？何って、遊びに来ただけど・・・」

平然と答えるミクに

「・・・明らかに人数とジュースとか菓子の量が比例してないと思うんだが？」

と言った。

というのも、リンは手ぶらだったがミクは両手に袋からあふれそうなくらいの量の菓子を、ルカさんは両手に一本2リットルは入っているペットボトルをぱつと見6本は持っていたのである。

「え？そうかな？これくらいないと足りないと思って」

ミクが菓子を見ながらそういうのを見て

「・・・今何時だと思ってる？」

そう質問してみる。

「え？今は・・・3時半だね」

腕時計をみながらミクが答えた。

「そうだな。確かにおやつ時だな。でもそんなに食えるわけねえだろー!」

そう突っ込むと

「いいじゃない。食べ切れなかったら姐さんやカイト兄さんと呼ばばいいわ」

とルカさんがさらっととんでもないことを言った。

「・・・ルカさん・・・俺の家はそんなに人数は入れませんよ？見て分かりますけど・・・」

そういつてルカさんの意見を却下しようとするものの

「大丈夫よ。きっと何とかなるわ」

と全く根拠のなさそうなことを平気で言い放つので

(だめだ・・・この人まともかと思っただけど案外適当だ・・・)

そう思いため息をついた。

「やったー!! 私一番乗りい!」

で、さすがに俺の持つてるゲームでは皆で遊べないので、トランプを引き出しから引っ張り出して皆で大富豪をやっていたのだが

（くそっ…今日はやたらと負けるな…）

さっきからずっと大貧民から抜け出せず、逆にずっとリンが大富豪の座に居座り続けていた。

「リンちゃん強いねえ…」

リンの強さに驚いてしみじみとミクが言う。

「まあね！それでも私、中学では幸運の女神って呼ばれてるからさ！」

胸を張って言うリンに

「あれ？雨女って呼ばれてなかったっけ？」

と、すかさずレンが突っ込むが、その直後リンの鉄拳制裁を喰らって倒れた。

「レンは余計なこと言わないで！」

倒れたレンに少し顔を赤くしながら言っていたリンだったが、俺にはそんなことどうでもよかった。

さっきから自分だけ負け続けていて、しかもリンばかり勝ち続けていることが気に食わなかったし、ムカついていたからだ。

（皆でグルになってイカサマしてんじゃないかねえのか？）

そう思うことは確実に逆ギレであり自分勝手な考えであることは頭では分かっていたが、あまりに負け続けていたのでそう思わずに

はいられなかった。

「もっかいやるー！」

そんなことを考えている俺の耳にリンの元気な声が響いた。

（こいつ、調子乗りやがって…）

普通に聞けば一緒にもう一度やろうと思うような声のだろうが、今の俺には耳障りな音でしかなかった。

「俺はパスするわ」

これ以上負けてストレスを溜めたくはないし、皆に八つ当たりしたりして場の雰囲気壊したくはなかったので、そういつて席を離れた直後

「えゝっ！いーじゃん！もっかいやるうよー」

と後ろからリンの声が聞こえた。

「別に俺がいなくても十分人数たりんだろ。やるなら俺抜きでやれよ」

言った後で自分が明らかに刺のある言い方をしたことに気づいたが、訂正しようにも既に遅かった。

「そんなにきつく言わなくてもいいじゃん！！…もしかしてお兄ちゃん、さっきから負けてばかりだから嫌になったんでしょ？」

「なんだと・・・」

リンの的を射た言葉とその挑発的な態度に怒りを爆発させそうになったものの、かろうじて理性でそれを押さえ込んだ。しかし俺の声は誰が聞いても分かるくらいにいつもよりトーンが低く、怒っていることが丸分かりだった。

「ちよつ、ちよつと二人とも！落ち着いてよ！せつかく皆で集まったんだからさ、楽しく遊ぼうよ。ね？」

リンと俺の一発触発の空気の中、ミクが慌てて仲裁に入ってきたが今更皆と機嫌よく遊ぶなど到底できなかったし、そんなことしたくもなかったのだ。

「そんなに遊びたきや勝手にやってろ。俺はやらんぞ」

そついつてその場を離れ、テレビゲームを起動した。その直後

「ちよつ、リ、リンちゃん！それはダメだつて…あつ…！」

というミクの慌てた声が聞こえたと思ったら、背中に何か冷たいものがかった。

「ッ…！何すんだ…！」

怒鳴りながら振り返ると、そこには怒りで顔を真っ赤にしたリンが立っ

「最低っ…！せつかくお姉ちゃんが仲直りさせようとしてくれたのになんなの！？その態度…！」



と怒鳴ってきた。

「うるせえな！！ここは俺ん家だ！俺が何しようとか俺の勝手だろ！！」

もうここまでされてはこっちも怒りを抑え切れなかった。  
怒りに任せてリンに怒鳴り返す。

「自分の家だったからお客に対してどんな態度とつてもいい訳！？ありえないでしょ！！」

「いきなり人ん家押しかけといて何が客だ！！ふざけたこといってんじゃないぞ、このガキ！！」

「私はガキなんかじゃない！！ガキなのはお兄ちゃんの方だよ！！それにちゃんとお姉ちゃんが連絡したでしょ！！」

もう一步も引くことなどできなかった。ここで負けを認めるのはプライドが許さなかったし、まして相手が年下で、それも女ときたら何があっても引くわけにはいかなかった。

「家に着く15分前に初めてアポとつといて何言っただ！！普通そんなことしねえだろ！！礼儀を欠くにもほどがある！そんなことも・・・」

そのままリンをたたみかけようとした時

「もういいよ！！二人とももうやめて！！」  
というミクの悲痛な叫びが聞こえ、俺もリンも硬直した。

「もういいよ…いくら隣に住んでるからっていきなりお邪魔しても大丈夫って思った私がいけなかったんだよ…」

そういったミクの声は震えていた。だがさつさと家から出て行ってほしい俺は

「ならさつさと出てけ。邪魔くせえんだよ」

と心無い言葉を言い放った。

「ちよつと…!!」

俺の言葉に一瞬怒りを爆発させそうになったリンだったが

「リンちゃん。私なら大丈夫だから。今日はもう帰ろう？また皆で遊べばいいんだからさ」

というミクの言葉に衝撃を受け、黙り込んでしまった。

「駿君…ごめんね。お邪魔しました…」

そう一言だけ言って、ミクはリン達を連れて部屋から出て行った。  
…否。一人だけ玄関で立ち止まっていた。

「駿君。あなた自分が何をしているか、分かってる？」

玄関にいたのはルカさんだった。

「ちつ…お説教なら聞きませんよ。早く出てってください」

説教など聞きたくもないのでそういつてルカさんを追い払おうとした。

「そう…でもひとつだけ言わせてもらっわ。あなた、今のままだと友達いなくなるわよ」

「結構だね。友達なんて必要ない」

「そう。余計なお世話だったみたいね。じゃあ、さようなら」

そういつてルカさんも部屋から出て行つた。

（どいつもこいつもうつとうしい…だから人と付き合つのは嫌いなんだ）

改めて、自分は一人であることのほうが好きだということを実感した。だが

（あなた、今のままだと友達いなくなるわよ）

というルカさんの言葉が頭から離れなかった。

（…俺が友達を欲しているとしても？馬鹿馬鹿しい、そんなことあるわけねえだろ）

忘れようとしても、頭から離れないその言葉とあの時のルカさんの顔を思い出し、腹立ち紛れにゴミ箱を思いつき蹴飛ばした。

そしてイライラしながらミクたちが食べ散らかしてそのままにしていた菓子残渣と蹴飛ばして散らかったゴミの片付けに取り掛かった。

**第11話 とある休日にて 後編（後書き）**

なんとか更新出来た…

今後の更新予定については活動報告の欄をご覧ください。

## 第12話 ルカの悩み（前書き）

結局我慢できず書きましたww

でもいつもより1500字程度少なめで短いです。  
テスト終わるまで多分こんな感じになると思います。

## 第12話 ルカの悩み

「じゃあ、今日はこれで終わりでござる。号令」

『さようなら』

生徒達が挨拶をし終わると同時に、それぞれの行動を取りはじめた。

部活に行く者、家に帰る者、残って勉強していく者。皆様々に動く。そんな中、一人だけ様子の違う者がいた。

「…ミク殿？どうしたでござるか？」

拙者が声をかけたのはいつもは明るく元気に振る舞って他の者からも好かれているミク殿だった。

「あ…ガクポ先生…」

そう返事してこちらを見たミク殿の顔は普段の彼女とは似ても似つかぬ程暗い表情をしていた。

「何か悩みでもあるのでござるか？拙者で良ければ相談に乗るでござるよ」

と声をかけるものの

「いえ…大丈夫です。悩んでる訳じゃなくて、ちょっと疲れ気味なだけですから…」

そうつってかばんを持って教室から出ていってしまった。

「はて…一体彼女に何が…」

とぼとぼと廊下を歩くミク殿の背中を見送りながら、拙者は一言  
呟いた。

「ガクポ先生、今日もお疲れ様でした」

「おろ？ハク先生。先生も今から帰りでござるか？」

一日の仕事を終え、職員室から出ようとした拙者にハク先生が声  
をかけてきた。

「はい。私も今仕事が終わったところです」

「そうでござるか。なら今日はちよつと一杯飲みに行かぬか？」

「あら、いいですね。行きましょうか」

ということで拙者達はいつも行っている馴染みの居酒屋に向かって  
歩き出した。

「そろそろ新年度が始まって二ヶ月が経ちますね。ガクポ先生は生徒達と仲良くなれましたか？」

駅の近くに来た時、唐突にハク先生が聞いてきた。

「うんにゃ？どうでござるかな…まだあまり話したことの無い生徒もいるから、まだまだでござるよ」

「そうですか…私もなかなか皆の名前覚えられなくて、良く間違えちゃうんです。…ああ、やっぱり私は教師に向いてないのかな…グズッ…」

「ハク先生、お、落ち着くでござるよ！」

半泣きになってしまったハク先生を慌ててなだめる。

この先生、とても良い先生なのでござるが些細なことですぐに物事を悪い方向に考え、泣き出す上に酒に逃げやすいという少々困ったところがある先生であった。

「うう…私はどうせ名前も覚えられないダメな教師なんだ…」

（参ったの…いつものことではあるが、やはり泣かれてしまうとな…）

そんなことを考え、何か良いものはないかと辺りを見回していると

（おろ？あれは…）

右方向に見覚えのあるピンク色の髪をした女性がいた。

「おおーい！ル力殿ではないかー！」

拙者の目線の先にいたのは、かつて卒業した大学を訪れた時に仲良



くなつたルカ殿だつた。

「あ…ガクポ先輩…」

（おろおろ？ルカ殿も凹んでおるな…）

拙者に気づいたルカ殿であつたが、どうも何か悩んでいるようであつた。

「どうしたでござるか？随分悩んでいるようだ…」

そう拙者が問うと

「あ…いえ…」

と口ごもってしまった。

「まあ、一緒に酒でも飲まぬか？たまには良いだろう？」

「でも私、お酒は…」

「良いではないか。そんなにたくさん飲めと申してる訳ではない。それに、酒も適量ならすすきりするしの」

そう誘うと

「あ…じゃあちよつとだけ…」

と言つてくれたので

「では行こうか。ハク先生、行くでござるよ」

「えぐっ…はい…」

そして拙者達は居酒屋に入ってしまった。

「で、何を悩んでいるのでござるか？」

居酒屋に入ってしまった頃、それとなくル力殿に聞いて見る。ちなみにハク先生はやらなくてはならぬ仕事を思い出したと言ってタクシーで先に帰ってしまった。

ル力殿はちよつとだけ、と言っていた通り拙者に比べれば半分にもならぬ量しか飲んでいなかったが、それでも少し酔いの回ったのかぼつりぼつりと語り始めた。

「私、今、年下の女の子達と仲良くしてるんですけど、あ、別に小学生とか幼稚園生とかじゃなくて中学二年生と高校一年生の子達で名前はリンちゃんとミクちゃんって言ってますけど…」

「そういえばル力殿は子供が大好きであつたな？」

おちよこに酒を注ぎ、酒を口にしながらそう聞くと

「はい…それでその子達とこの間遊んだ時にミクちゃんの友達の家に行こうって話になって…」

そういつてからル力殿は酒を飲み干した。

「…その友の家で何かあつたのでござるか？」

という拙者の問いにルカ殿は頷いた。

「…最初は皆で楽しく遊んでたんです。でも途中からその友達が不機嫌になってきちゃって。でも彼は彼なりに気を利かせたつもりだったんだと思うんです」

「というと？」

「トランプで遊んでたんですけど、その子ばかり負けてて流石にイライラしてたみたいなんです。だから皆に迷惑かけないように席を離れようとしてたんだと思うんです」

拙者は頷き先を促す。

「でもリンちゃんが一緒にやろうって言ったんです。…実は彼がずっと負けてる間、逆にずっとリンちゃんが勝ってたんですよ。だからちょっとカチンときたのか彼、きつく言っちゃったんです」

「きつく言うとは、どんな風に言ったのでござるか？」

少し気になったので聞いてみると

「えっと…俺がいなくても十分人数たりんだろ。やるなら俺抜きでやれよ、って冷たく言ったんです」

「そうでござるか…それで？」

そう拙者が促すと、また酒を少し口にしながら

「そしたら、彼の返事にカチンときたリンちゃんが、もしかしてず

つと負けてるから嫌になっただんでしょ？って挑発しちゃって…」

（何となく読めたでござるな…）

「それで、売り言葉に買い言葉で喧嘩になっただでござるか？」

拙者の問いにル力殿は

「ちょっと違うんです。…まあ結局は喧嘩したんですけど、その時点でミクちゃんが止めようとしたんです」

「おろ、そうであつたか」

「はい…でもミクちゃんの言葉に彼は耳を貸さなかったんです。それでリンちゃんが完全に怒っちゃって…」

「そうか…」

まあ、今までの状況は大体理解出来たのだが、何故それでル力殿が悩んでいるのか拙者にはまだ分からなかった。

「それで、喧嘩になっただでござるか？」

「はい…でもリンちゃんも男の子の方も凄い剣幕で喧嘩してて私、止められなかったんです…」

そういつてル力殿は再び酒を飲んだ。

「それで、止められなかった自分が不甲斐なくて悩んでおつたのか

「？」

拙者の問いにル力殿は

「それもありますけど、その後あったことの方が悩みの種なんです……」

「と申すと？」

「結局、ミクちゃんが止めたんです。…私が悪かったんだって言うて…でも彼は、すごく冷たい言葉を言って…それで私も頭にきちゃって帰る時に、あなた友達いなくなるわよって思わずひどいこと言ってしまったんです…」

そこまで言うるとル力殿は大きなため息をつき

「…ガクポ先輩、私自信ないんです。ミクちゃんにあんな冷たい言葉を言った彼も悪いけど、自分の感情をコントロールできないで私にひどいこと言って…こんなことで教師になれるのか、不安なんです…」

そういつて再びため息をついた。

「そういうことであつたか…」

ようやく、ル力殿の悩み事がなんであるかわかった。

「案ずることはない。おぬしもその友達も皆人間だ。誰しも間違いは犯すものでござるよ。大切なのはその過ちを次に活かそうとするかどうかではないのか？大丈夫でござる。ル力殿ならきつと良い教

師になれるでござるよ」

そういった拙者にル力殿は

「…ありがとうございます。私、もう一度頑張ってみます！」

と笑顔を見せてくれた。

「うむ。頑張るでござるよ。ところでさっき言っていた、え〜と…誰だったかな？ル力殿の高校生の友の名は」

「初音ミクちゃんですけど？」

「そうそう。ミク殿で…ってミク殿だど！？」  
今更ながらその名前を聞き驚いた。

「え…先輩、ミクちゃん知ってるんですか？」

向こうも驚いた様子でこちらを見た。

「知ってるも何も、ミク殿は拙者の担任しているクラスの生徒でござるよ。ということは友の名は天川駿でござるな？」

「え、ええ…驚いたわ…先輩の生徒だったなんて…」

「拙者もでござるよ。偶然なのか必然なのか…まあ、二人には後で話を聞いてみるとするでござるよ。…さて、遅くなってしまったな。帰るとしようか？」

そういつて拙者達は居酒屋を後にし、ル力殿とは駅で別れた。

(…これはなかなか難しい問題かもしれんの…)

ひとり、そんなことを考えながら拙者も家路に着いた。

## 第12話 ルカの悩み（後書き）

読者の方に「ガクポ視点を見てみたい」とリクエストしていただいたので、書いてみました。

これから何話かガクポを出す予定です。

テスト勉強なんてなかった！キリッ



### 第13話 友達の定義（前書き）

テストが終わりました。悪い意味で

ということでは13話です。ちょっと短いです。

### 第13話 友達の定義

「はぁ……」

私は今日何度目かのため息をついた。

（…駿君、まだ怒ってるんだろうなぁ…）

ため息の理由、それは駿君とのことだった。

（許して…くれないよね…駿君の言う通り、行く直前になって遊びに行っていていいか聞くななんて非常識だよ…）

数日前、女子会の流れで駿君のお家に行こうって話になったのはよかったんだけど、そこでリンちゃんと駿君が喧嘩し始めちゃって私がなんとか止めたんだけど、駿君は完全に怒ってて…それから最近はずっと口を利いてくれないし、登下校も別々になっちゃってた。

「はぁ……」

そつと、隣の席を横目で見る。

駿君は耳にイヤホンをつけて曲を聞きながら、机に突っ伏して寝ていた。

「ミクちゃん？どうしたの？」

視線を前に戻し再び俯いていると、突然声をかけられた。

「えっ……あ、紅葉ちゃん……」

私に声をかけてくれたのは白河<sup>しらかわ</sup> 紅葉ちゃん<sup>くれは</sup>だった。  
駿君の他にこの学校で仲良くなった友達で、いつも一緒にお昼ご飯を食べたりしてる。

「何か最近ミクちゃん元気ないみたいだけど、嫌なことでもあったの？」

心配そうな目で私の顔を覗きこみながら紅葉ちゃんが聞いてきた。

「あ……ううん！大丈夫。最近ちょっと疲れ気味でさ。五月病ってやつかな？」

紅葉ちゃんにだったら本当のことを話して相談するのもいいかもしれないけど、これは自分が起こした問題だから紅葉ちゃんを巻き込んで彼女に余計な心配はかけたくなかった。

「……そう？ならいいけど……何かあったら相談してね？力になれるかもしれないし」

正直、こういうことを言ってくれてすごく嬉しい。でも、その優しさがいままで続くのだろう、と考えると

（……あまり仲良くなり過ぎない方がいいのかな……）

って思わずにはいらなかった。

（私の秘密を知ったら、仲良くはしてくれないよね……）

誰にも言えない私の秘密。

今はこうして普通の公立高校に通っているけれど、本当だったらもっと別の高校に通っていたはずだった。

そう、皆が俗に言う「お金持ち」の人が通う高校に…

でも私はそれが嫌だったから無理を言って普通の高校に通わせてもらうことにした。

それでもやっぱり不安は拭えなかった。私の秘密を知った皆が私から離れて行くんじゃないかって、また中学生の時と同じことになった。つちゃうんじゃないかって、不安にならずにはいられなかった。

「…ミクちゃん？大丈夫？」

名前を呼ばれたことに気づき、はっと我に帰る。

「あ…紅葉ちゃん…どうしたの？」

そう質問した私に紅葉ちゃんは

「どうしたの？じゃないよ。またぼーっとしちゃってさ。ほんとに大丈夫なの？」

と言い返して心配そうな目で私の方を見てきた。だから

「大丈夫だよ」

と言って私は笑った。  
でも

「…ミクちゃん、嘘つくの下手くそだね。全然大丈夫そうな顔して

ないよ？いかにも悩み事があるって顔してる」

って言われた。

「え…そんな分かりやすい顔してる？」

そう聞くと

「うん。だって半分泣きそうな顔してるもん」

と返された。

「え…？」

そんな酷い顔をしているのかと思い、手鏡を取り出して自分の顔を見してみると、そこには確かに泣きそうな私が写っていた。

「あ、ほんとだ…酷い顔だね」

「だから言っただじゃん…」

…そんなに辛いことなら一人で抱え込まないで、相談してね？私達、友達でしょ？」

「友達」。その言葉を聞いてふと気になった事があった。

「ねえ紅葉ちゃん。友達ってなんなのかな？」

私の突然の質問に戸惑いを見せた紅葉ちゃんは

「え…友達って何って聞かれてもなあ…」

と困ったような表情をしちゃったから

「あっ…ごめんね。急に变なこと聞いて」

そういつて慌てて謝った。

「ううん。大丈夫だよ。でも聞かれると意外と答えられないんだね」

「そうだね…」

そんな会話をしているうちに、授業の始まりを告げるチャイムがなった。

(…友達って、本当にどういう存在の人のことをいうのかな…)

ぼんやりとそんなことを考えながら、私は授業の用意をした。

・ ・ ・ ・ ・

今日も無事に一日が終わり、帰りのホームルームも終わった。生徒達はいつものように部活に行ったり、家に帰ろうとしていたりといつもと変わらない様子であった。

拙者は意を決して一人の生徒に近寄った。

「ミク殿？少し良いでござるか？」

拙者が声をかけた生徒は、先日ルカ殿との話題の中に出てきた生

徒だった。

「あ…がくば先生…大丈夫ですよ？」

「そうでござるか。なら少しばかり話したいことがあるのでな。ちよつとついて来てもらえぬか？」

「え…まあ、いいですけど…」

少しだけ怪訝そうな表情をしたが、ミク殿は素直についてきてくれた。

拙者達は職員室近くの面談室に入り、お互い向き合うような形で座った。

「…話ってなんですか？」

座ってから先に口を開いたのはミク殿だった。

「…単刀直入に申そう。最近ミク殿を見ていてかなり深刻な悩み事があるように見えるのでござるよ。拙者は担任でござるから、生徒の悩みごとは一緒に解決しようという志を持っているゆえ、少々迷惑かもしれんがこうして来てもらった訳でござる」

そういった拙者に対しミク殿は

「そうですか…でも先生、私そんな大層な悩み事はないんですよ？だから…大丈夫です」

ミク殿はそういつて拙者に笑顔を見せようとしたのだろう。笑ってはいたが、その目には涙が溜まっていた。

「…ミク殿はあまり嘘をつくのが上手でないようですね」

「え…？」

「目に涙が溜まってあるよ」

拙者がそういうと

「えっ…嘘…」

と驚いた表情をして慌てて目を拭った。

「…でも、そんなに大したことじゃないんです。ちょっとつらいな  
って思うこともあるけど…」

拙者に指摘されてもなお、大したことがないと言い張ろうとして  
いたが

「ほんと、に…大したこと…じゃないんです」

堪え切れなくなったのか、ボロボロと涙をこぼし始めた。

「…事情は、大体聞いておるよ。天川と揉めてしまったようですね  
るな？」

「どこでそれを…？」

「巡音ルカ殿は知っておるな？彼女は拙者の後輩なのでござるよ。  
このあいだ偶然ルカ殿に会ったの。そこで聞かせてもらった」



「そうですか…」

「…」

「…」

しばしの間、沈黙が流れる。ミク殿はしばらく下を向いて黙り込んでいたが、少しだけ顔を上げて拙者に質問をしてきた。

「…先生、友達ってなんですか？」

「…」

予想外の質問に拙者は驚き言葉が出なかった。

「私、駿君とは友達だと思ってたんです…でも、駿君はそう思っていなかったのになって…私は駿君にとってただ面倒くさいだけの隣人だったのになって…」

そういつてミク殿は再び下を向いて涙を流し始めた。

「…友とはいったい何か、か」

（そういえば昔、拙者も同じことを考えたな）

かつて拙者も親しいと思っていた友とちょっとしたことで大喧嘩をし、その時の拙者も友とは一体何なのか、しばらくの間ずっと考えていた時期があった。

（人ならきつと一度は思うことなのだろうな…）

目の前でかつての自分と同じ疑問を抱いているミク殿を見て、しみじみとそう思った。

「私、分からないんです…友達ってどういう関係の人のことを言うんですか？」

泣きながらそう問うてきたミク殿に、拙者はかつての自分を重ねながらこういった。

「友という存在に、どうもへったくれもないでござるよ。別にいつも一緒にいるから友というわけでも、よく遊ぶから友というわけでもなかるう？…強いて言うなら、互いに互いを大切に思えればいつも一緒になくても、一緒に遊んだりしなくても良いのではないか？それに…」

「それに？」

「友だから喧嘩をしないなんてことは、ないのでござるよ。むしろ、喧嘩をして互いの思いをぶつけ合って初めて分かりあえることもあるからの。別に喧嘩をしたからとか、ちよつと意見が食い違ったりしたくらいで、そんなに心配することもないのではござらんか？」

かつて拙者が出した答をミク殿に伝える。それでも、ミク殿の表情が明るくなることはなかった。

「…でも駿君は、友達なんか要らないって…」

「…そうか…だが、天川は本当は友達が欲しいのではないか？」

「…え？」

拙者の言葉にミク殿は思わず驚きの声を上げた。

「駿君が…友達を欲しがってる？」

「左様。これはあくまで拙者の推測に過ぎぬから当たっているかはわからぬが、恐らく天川は今まで友と呼べるものがほとんどいなかったのではないだろうか。仮に友と呼べるものがいても、皆彼の元から離れていってしまったのだらう。だから他人を遠ざけて、友を作らぬようしているのではござらんか？自分の元からともが離れる悲しみや辛さから逃れるために」

「ほんとにそうでしょうか？」

信じられないといった表情でミク殿はそう問い返してきた。

「どうでござるかな？違うかもしれぬが、拙者が見ている限りではそうではないかと思うでござる」

そう答えた拙者にミク殿は

「…分かりました。私、もう一度がんばって駿君に声をかけてみようと思います」

といって笑顔を見せた。

「うむ。がんばるでござるよ。さて随分と時間が経ってしまったな…気をつけて帰るでござるよ」

「はい！さようなら先生」

そついつて帰るミク殿を見送りながら

(ミク殿…がんばるでござるよ)

と心の中でもう一度声援を送り、職員室に戻って残りの仕事を片付けることにした。

### 第13話 友達の定義（後書き）

最近どうも調子が悪い…

ねたは浮かぶんですが、文章にうまくかけなくて…小説ってやっぱり難しい…

第14話 ミクの想い、駿の想い 前編（前書き）

14話です

## 第14話 ミクの想い、駿の想い 前編

6月10日、木曜日。

学校の授業が全て終わり、ホームルームも終わったので俺はすぐに家に帰る準備を済ませ、教室を出た。

(… やつと木曜まで終わったぜ… これで後は金曜日をやり過ごすだけだな)

そんなことを考えながら、校門を出て家に向かって歩く。

… ちなみに最近ミクと一緒にではなくずっと一人で登下校をしている。

(あいつもその方がいいだろ。俺みたいな奴なんかといるより他の連中といった方が楽しいだろうし)

ミクはどうであれ、少なくとも俺はそう思っているので特に一人で登下校することに躊躇いは感じなかった。

(それに、正直いない方が気が楽だし)

そう思っていたが、ふと心の隅で何とも言えないモヤモヤしたものがあることに気づいた。

(… 別に俺は何も間違ったこととしてねえだろ。なのになんでこんなにスツキリしねえんだ?)

理由の分からないことを考えていても仕方ないのは分かっていたから、気にしないように努力したが、それでも心の中のモヤモヤした

ものが気になった。

（まさか、友達なんて要らないって自分で言っというて実は違うとか？ふん…馬鹿馬鹿しい。そんなことあるわけねえだろ…あゝあ、下らんこと考えちまった。さっさと帰ってゲームするか…）

そんなことを考えながら家まであと少しのところまで歩いてきた時、ぽつり、ぽつりと雨が降り出した。

（ちっ…雨降ってきたな。少し急ぐか）

本降りになる前に家に帰ろうと、俺は走り出した。

・  
・  
・  
・

（結局、今日も話しかけられなかったな…）

かくぽ先生と話してから三日。ずっと駿君に話しかけようとしたけど、いざ話しかけようとするとなんだか気まずくて話しかけられなかったり、駿君がどこかにいつちゃったりして話しかけられずにいた。そんなことをしている内に気がついたらもう三日も過ぎていた。

（…どうしたらいいんだろう。でも、せめてちゃんとこの間のごことは謝らないとな…）

ずっとそう思っているけど、どうしても話しかけられなかった。

「ミクちゃん。一緒に帰ろ？」



ぼんやりとしている私に紅葉ちゃんが声をかけてきた。

「あ、うん！帰ろっか？」

そう返事をして、私たちは教室を出た。

・

昇降口に向かって歩いていく時、急に後ろから

「あ、初音さん」

という私の名前を呼ぶ声が聞こえた。

「はい？」

返事をしながら後ろを振り返ると、そこには見慣れない男の子が立っていた。

「初音ミクさんですよ？僕、黒田くろだ賢児けんじっていうものです！いやあ、お会いできて光栄ですよ！」

「はあ……」

全く見知らぬ人に突然声をかけられ、しかもフルネームまで知られていて何が起きているのか分からず混乱していると

「ミクちゃん、知り合い？」

と横で紅葉ちゃんがささやいた。

「ううん。知らない人」

そつ返すと黒田と名乗った男の子が

「まあ、知らなくて当然ですよね」

といって私に何かを差し出してきた。

「…？なにこれ？」

差し出されたのはどこかの会社の社員証のようなカードだった。よく見ると、いつだか忘れたけど見たことのあるマークがプリントされていた。

「…！…！こ、これ…」

一緒に見ていた紅葉ちゃんが驚いた表情をして私のほうを向いて

「これ、あの有名な黒田財閥のマークだよ！」

と言った。

「じゃあ、あなたは…」

そのカードから目の前にいる男の子に視線を向け、そついうと

「はい。黒田財閥の御曹司ってところですかね。まあ、俗に言ってお坊ちゃまってやつです」

とにこやかな笑顔を見せながら返事をした。

（財閥の息子！？だから私の名前を…

どうしよう…このままだと私の秘密が…）

目の前にいる人が有名財閥の息子だとすれば、当然私のも知ってはおかしくない。

黒田君のように堂々と教えたりしないで皆には秘密にしているけど、私も彼と同じ有名財閥の娘だから…

でもここでそのことを話されてしまえばいくら紅葉ちゃんでも誰かに話してしまうだろうし、なによりそれを知った皆が私から離れていくのが嫌だった。

「ごめんなさい。私ちょっと今日は急ぎの用事があるから…さよなら！」

そう黒田君に向かってそういうと、私は紅葉ちゃんの手を引っ張って逃げるようにその場を去った。

「…いつまでも隠せるとは思わないことですね。初音財閥の令嬢さん」

ミク達が去った後、そう静かに黒田は呟いた。

・  
・  
・

「ちょっと！どうしたのミクちゃん？そんなに逃げるようなことしなくなっただけじゃん！折角すごい人に声をかけてもらえたのに…」

昇降口を出て、校門に向かって歩いている最中に紅葉ちゃんに  
向かってそういった。

「ごめんね…でも私、ああいう人苦手なんだ」

そう謝ると

「いいけどさ。…でも、お金持ちの人ってほんとなんか違うよね？  
雰囲気というかなんというかその辺がさ」

と同意を求められたから

「そうだね…」

とだけ返事をした。

そんなことを話しながら校門を出た時、雨が降り出した。

「うわっ！雨降ってきちゃった！！ミクちゃんまたね！！」

「うん！また明日！！」

お互いそついいながら、反対方向に向かって走り出した。

（もう…折り畳み傘くらい持って置けばよかったな…）

心の中で後悔するものの、傘も何も持っていないので仕方なく鞆を  
頭の上に乗せて手で押さえながら雨に当たらないようにして家に向  
かって走った。

・  
・

家に着いた頃にはもう全身ずぶ濡れになっちゃって、とりあえず軽く水を玄関の外で払って家に入った。

(…それにしてもあの黒田って人…厄介だなあ…)

濡れてしまった制服をハンガーにかけて干しながらそんなことを考えた。

(変に出くわして、秘密をばられないようにしないとな…)

まさか、同じ学校に私と同じような有名財閥の子供がいるとは思わなかった。

(もし私の秘密がばらされちゃったら…皆は私をどんな風に見るんだろう?)

また一つ、悩み事が増えてしまった。

(駿君とも友達でいたいし…どうしたらいいの?)

そんなことを考えてたら、胸が締め付けられた。

(…寝よう。今日は疲れちゃった…)

そう思い、髪だけ乾かして寝間着に着替えると、すぐにベッドに倒れ込んで寝てしまった。

「ん…寒い…」

急に寒気を感じて、私は目を覚ました。

「うう…なんか頭がぼくつとする…」

とりあえず何か飲もうと体を起こすと、ずきずきと頭が痛んだ。

（…やだ、風邪引いたかな…）

足を踏み出す度に頭が痛み、ふらふらしたからキッチンに行くのも一苦労だった。

何とかキッチンにたどり着き水を飲んだけど、全然楽にならなかった。だから、とりあえず熱を計ることにした。

・

ピピピピッ

ピピピピッ

「…うわ」

体温計が示した温度は38.3度だった。

「…今何時だっけ？」

起きた直後からずっと頭痛と寒気を感じてて、時計を確認するのを忘れてたから、今が何時なのか見るために壁に掛けてある時計に目を向けた。

「…あれ？もう日付変わってる…」

時計は6月11日の午前3時を示していた。

(…家帰ってきてもからずと寝てたんだ…)

どうやら、私は夕飯も食べずにずっと寝ていたみたいだった。  
でも、だからといって特にお腹がすいている訳でもなかった。

(…今から寝たら熱下がるかな?)

そう思って、私はもう一度寝ることにした。

・  
・  
・  
・  
・

ビーン!!

ビーン!!

「んあ? ああ、もう朝か…」

目覚まし時計を止め、俺はベットから起き出した。

(今日も学校か…めんどくせえなあ…)

朝飯の食パンをかじりながら、そんなことを考える。

(ま、今日が終われば土日で学校休みになるからいいか)

そうは思ってもやはり面倒くさいものは面倒くさい。だらだらと準備をしていると、8時になっていた。

「うわっ！！遅刻する！！」

慌てて準備を終わらせ、家を飛び出す。

自転車は引越してくる前にリサイクルショップに売り出して自分の小遣いにしてしまったので、持ってない。つまり学校まで走らなければならなかった。

（走ることなんざ中学以来だぜ…）

中学時代、唯一といってもいい最高の思い出を思い出しながら、俺は学校へダツシュした。

全力で走ったことが功を奏したのか、何とか遅刻することはなかった。

息を切らしながら教室に入り自分の席に座る。すると誰かが俺に話しかけてきた。

「天川君、ミクちゃん知らない？」

話しかけてきたのは、クラスの女子だった。確かよくミクと一緒に飯を食ってた奴で、ミクには「紅葉ちゃん」と呼ばれていた奴だと思う。苗字は…俺の記憶が正しければ白河、だった気がする。

「あ？知らねえよ。どうせ寝坊だろ」

いくら一時期一緒に登下校をしていたからといって、何でもミクの連絡が俺に来ると思いい込むのはやめてもらいたかった。だから、適当にそう返事をしておいた。



「寝坊かなあ？違うと思うけど」

さっさといなくなれば良いと思って返事したのが、予想に反して相手が言い返してきたことにイラつき

「ちっ…知らねえつつてんだろ。そんなにミクが心配なら電話でもすりゃあいいだろうが」

と言い放った。そして言った直後にまた言い過ぎたことに気づいた。

(…また逆切れされんだろうな…)

俺の予想通り、白河は

「ちょっと！そんな言い方ないでしょ！？天川君はミクちゃんの友達じゃないの？！」

と俺に向かって怒鳴ってきた。

「知るかそんなの！大体なんでちょっと登下校を一緒にしてただけで友達になるんだよ？俺はあいつの友達になったつもりなんてねえし、あいつだって俺のことを友達と見てるわけねえだろ！」

学校に来て早々、ミク的话题を出されてイラついていたことに加え、白河の「友達じゃないの？」的な発言に思わず頭に來てしまい、怒鳴り返す。

「なんですって…！」

白河がまた何か怒鳴り散らそうとした時、教室に侍担任が入ってきた。

「おろ？今日は朝から随分と修羅場でござるな？」

「…！が、かくぼ先生…」

白河が侍担任が来たことに驚き硬直する。

「何があつてそんな言い争いをしていたのか、拙者に教えてくれぬか？」

いつも通りの優しそうに見える笑顔を浮かべながら、かくぼ先生が俺達に聞いてきた。

「別に…大した事じゃないです。それに喧嘩の一つや二つくらい、どうってことないでしょう？」

教師まで絡んでくるとなおさら厄介なことになりかねないので、そういつてこの話題を終わりにしようと思ったのだが

「喧嘩は良くないでござるよ。それにお互いに気まずいまま終わらせるよりちゃんと謝ってすっきりと終わらせたほうが良いのではないか？」

と、やたら教師面して首を突っ込みたがるので、何か言い返そうと口を開いた時

「先生、ミクちゃん、今日学校休むって連絡は言ってますか？」

と白河が横槍を入れてきやがった。

「ミク殿でござるか？今日は風邪で欠席するという連絡が来ておるが…それがどうかしたのでござるか？」

「いえ…いつももう学校に来てるのに、今日は来てないから…」

そう白河が言うと、がくぼ先生は

「なるほど、読めたでござるよ。おぬし達ミク殿のことで揉めてたのでござるな？」

とドヤ顔をして俺達に言ってきた。

「あ…まあ、そんなところです…」

白河が俯きながらそう答える。それに対してがくぼ先生は

「そんなに心配しなくても、ミク殿なら月曜日にはちゃんと学校に来れるでござるよ」

とまたも優しそうに見える笑顔で白河に言った。

「でも…」

それでも暗い表情の白河に向かって先生は

「大丈夫でござるよ。それに、紅葉殿のそんなくらい顔をミク殿が見たらきつと心配してしまうでござるよ」

といかにも決め台詞的な感じで言った。

(…茶番だな…くっだらねえ)

まるでどこかの漫画の世界にありそうなシチュエーションに呆れながら椅子にふんぞり返った。

「さて、ホームルームを始めるでござるよ。皆の者、着席するでござる」

こうして、今週最後のめんどくさい学校が始まった。

(…友達だと？そんなくだらねい存在作ってなんになる？くだらね…)

この前の女子会(笑)の連中が来た時のルカさんの言ったことやさつき白河に言われた「友達」という言葉が頭から離れず、無性にいらいらしながらホームルームを過ごした。

(俺に友達なんて必要ない。作ったって、どうせ皆俺から離れていくのが関の山だ。なら作る必要なんてねえだろ?)

そう思い、さっさとこの事を忘れようとしたがそれでも忘れることはできなかった。

## 第14話 ミクの想い、駿の想い 前編（後書き）

気がついたらユニークアクセスが600を超えていました。読者の皆さんいつも読んでくださりありがとうございます！！

これからもがんばって書いていこうと思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5346x/>

---

そよ風に歌声を乗せて

2011年11月26日17時56分発行